328
378

76

328
378

御製集

第四卷

4. 10. 25
購求

378

例言

本卷には、後亀山、後小松、後花園三代の御製を謹輯し、これに添ふるに後亀山院中宮の御歌を以てせり。

本卷には、後亀山院千首和歌抜書一卷、後小松院御百首一卷、後小松院御百首和歌一卷、後花園院御製和歌集三卷、後花園院御百首一卷、後花園院詠五十首一卷合六種八卷を收載し、これに本會にて謹輯せる後亀山院御集拾遺、後小松天皇御製、後花園院御集拾遺、後亀山天皇中宮御歌の四種を添へたり。

後亀山院千首和歌抜書は、その奥書に、天正六年法印眞性の抜書せるもののよし見ゆれども、いまは其原なる完き御集の、世に傳はれりや否明ならざるをもて、姑くこの抜書本を採錄することとせり。本書は和田英松氏の所藏にして類本なし。されば誤寫の明白なるものを改めたると、後人の、新葉集によりて書入れたりと見ゆる朱書の歌を削れるとのほかは、悉く原寫本のままにして、點者の加筆とおぼしき傍記の類もみなこれを存せり。

例言

後小松院御百首は類從本に據り、御小松院御百首和歌は圖書寮所藏の二本に據りて校合せり。

後花園院御製和歌集三卷、また圖書寮本を書寫收載す。本書上卷には撰歌御百首、寛正御百首、文明御百首、長祿御百首、應仁御百首、御獨吟御百首の六百首を收め、中卷には專ら諸社法樂の御製を錄し、下卷には文安、享德、長祿、文正の二十餘年間にわたれる御續歌の類を載せたり。寮本中別に後花園院御百首部類と題せる一書ありて、其奥書に、右一冊以聖護院宮御本寫之畢。慶長十一丙午九月十一日。權中納言判と見えたり。然るにこの御百首部類は、全く本書の上卷と同一にして、別種のものにあらず。されば幸に上卷のみは、之によりて校合することを得たれども、中下の二卷は、他に類本なきをもて對校することを得ず。後花園院御百首は、百首部類中に永享御百首として收めたり。詠五十首また圖書寮本以外に類本を得ず。

大正四年十月一日

古谷知新謹識

御製集第四卷目錄

後龜山院御製千首和歌……一―三四
春……一
夏……六
秋……九
冬……一五
戀……一八
雜……二四
後龜山院御製拾遺……三五
後龜山院中宮御歌……五一
後小松天皇御製……五五
後小松院御百首……六九
後小松院御百首和歌……八五

後花園院御製和歌集　上卷……一〇六―一〇五
撰歌百首……一〇五―一一〇
御獨吟百首寛正四年……一一〇―一一七
同御百首文明元年十二月十二日……一一七―一一五
同御百首長祿二年十二月……一一五―一一一
同御百首應仁三年三月十六日……一一一―一八九
百首御獨吟……一八九―二〇四
後花園院御製和歌集　中卷……二〇六―二〇六
五十首文明三年十一月十五日……二〇六―二一六
五十首年月不知之……二一六―二二四
普廣院贈太政大臣家諸社法樂……二二四―二三八
後花園院御製和歌集　下卷……二三八―二〇四
文安三年御製……二〇四―二〇六
文安四年御製……二〇六―二〇八
文安六年御製……二〇八―二一六
長祿三年御製……二一六―二二七
文正元年御製……二二七―二三一
文安五年御製……二三一―二三四
寶德元年御製……二三四―二三九
享德元年御製……二三九―二四三
寛正四年御製……二四三―二五二
享德四年御製……二五二―二五四
寛正二年御製……二五四―二五六
文明二年御製……二五六―二五五
寶德三年御製……二五五―二五六
年月不分明御製……二五六―二七八
次第不同御製……二七八―二一〇
後花園院御百首永享御百首……二一〇―二一九
後花園院詠五十首和歌……二一九―二四七
後花園天皇御集拾遺……二四七―

御製集　第四卷目錄　終

御製集　第四卷

後龜山院御製

千首和歌

天授二年秋書

春

早春河

やけふたつ春もいさや河きのふのままの床の山風

子日祝

松もひき若菜もつみてちとせまで老いせぬ春のためしをぞみる

關霞

後龜山院千首和歌

わきてまづ春くるかたと東路にかすみの關の名をやとめけむ

瀧霞

たがなかぞ霞の袖にたまちりてしたにながるる音なしのたき

島霞

へだてゆくまがきのしまは鹽竈のけむりよりこそ霞みそめけれ

餘寒水

さえかへる嵐にまたや氷るらむきえにし雪のまつの下水

隣梅

葦垣のへだつる軒の梅の花香はわが宿のものにぞありける

路若草

うちなびき末葉とやみむ青柳のかげふむ路にもゆる若草

關春月

あれまさる不破の關屋の板間をも霞めばもらぬ春の夜の月

夕春雨

つれづれとはれぬながめの庭潦みなわかたよる春のゆふ風

野春雨

みやぎ野の木の下草はいろそへて露にまさらぬ春さめのそら

庵春雨

いたづらにふりにしことも浮びきぬ草の庵の春のながめに

夜歸雁

山のはにかすみていづる月をさへ見捨てて歸る春のかりがね

海歸雁

すまの海士のもしほの煙たちわかれ秋はまどほの衣かりがね

尋花

山櫻まだみぬ色のをしきかなたづぬるほどのつもる日數に

見花

後龜山院千首和歌

吹くかせもをさまる春の花盛あかぬこころにまかせてぞ見る

瓶花

花ゆゑに物思ふ春をかぞへつつかつ恨みてもあかぬ色かな

夕花

なれなれて明日のつらさは思へども(もしちるれば)なほうとまれぬ花の夕ばえ

夜花

夢路にはたれうゑおきて櫻花ねても見ゆらむ春のよすがら

山花

わが宿もたのまずながら吉野山はなになれぬる春もいくとせ

瀧花

吉野河はるはおちそふ瀧つせの音せぬかたや花のしらなみ

古寺花

をはつせや尾上のさくらさきぬらし雲よりひびく入相の鐘

里花

浦近くふりくる雪やすみよしの里のしるべの櫻なるらむ

山家花

咲きぬともよそにしられぬ山里は花みがてらにくる人もなし

庭花

このごろはとものみやつこ暇あれや花ちる庭の朝ぎよめせで

花雲

さく花にまがふばかりの雲ならばたちかくすとも何かいとはむ

花鏡

面影のうかばぬひまぞなかりける心やいつの鏡なるらむ

花錦

山風にはなの錦のぬきをうすみみだれてにほふ(ぞちる)春のあけぼの

花主

後龜山院千首和歌

心にもおのがものから任せぬは風こそ花のあるじなるらめ

花形見

さくら花こころに殘る面影やかぜのさそはぬ形見なるらむ

落花

ありへての後をばしらず櫻花ちりてぞ人にうきめみえける

殘花

またれしはうかりしかども櫻花のこるひときは心ありけり

河苗代

苗代におのがひきびきまかすとも水ゆく川ぞくもでなりける

春海

里の蜑のをぢ(をぢ)のうら風のどかにていさりにくらす春の夕なぎ

夏

尋郭公

郭公ききつとかたる山人のあとをしるべになほやたづねむ

杜郭公

今こそはなのりてすぎめ郭公たれそのもりのむらさめの空

岡郭公

いはしろの岡の草根の明方にあはれもよほすほととぎす哉

浦郭公

郭公われをばよそに思へばや浦よりをちにはつね鳴くらむ

早苗多

くるとあくととるや早苗はおほあらきの杜のうき田にしめはへてけり

瀧五月雨

日をふればおちそふ瀧の白絲にぬきあへぬ玉の五月雨のころ

夏夜

後龜山院千首和歌

一聲にあくるよなれば(ヘイ)曉のゆふつけどりはいかがなくらむ

樹陰夏月

夏ふかくなりゆく宿の楢とはもりこぬ月のかげにこそしれ

庭瞿麥

庭の草のしげみにまじる撫子の花はあかぢのにしきなりけり

庭夏草

敎へおきしあとにまかせむ玉敷の庭の夏ぐさことしげくとも

浦螢

つつめども隱れぬものと袖の浦の波のよるよるとぶ螢かな

墻夕顏

光なき賤が垣根もしら雪にちぎりやおきし夕がほの花

河夕立

今日もまた夕立すらししかま河海にいでたる水のにごれる

樹陰蟬

夏山にこがくれてのみなく蟬の羽におく露に秋やみゆらむ

秋

立秋朝

いやましにかぜぞみにしむ(なみはあきとやなるみがた)秋のうらの朝みつ潮のなみのかよひぢ(うちかぜぞふく)

立秋風

あしのやのなだの潮風みにしみてわがすむ方に秋はきにけり

七夕衣

たなばたの天の羽衣かへしてやあかぬなごりを夢にだにみむ

夕露

夕暮のあはれはそれとわかなくに涙かずそふ袖のしらつゆ

故郷露

後龜山院千首和歌

故郷にもとこし人はむかしにてよもぎが露にあきかせぞ吹く

草露

風にたれあつらへつけて秋の野のくさの袂の露はらふらむ

袖露

ゆふぐれはたがならはしの涙にて袖にかならず露のおくらむ

女郎花靡風

あだなりと名にこそたてれ女郎花さそふ風あればうちなびきつつ

岡刈萱

夕ぐれの露ふきむすぶ秋風に下葉をれふすをかのかやはら

暁蟲

きりぎりす心かへして秋の夜のおなじねざめのあはれ知らばや

夜蟲

秋のよのおなじ思の蟲のねぞほたるよりけにあはれなりける

野蟲

おろかなる思ならじをなく蟲のなみだや野邊に玉をなすらむ

庵蟲

うきよをばふりすてこし草の庵に秋となづけて鈴蟲の聲

夜初雁

うちそよぐ竹の葉風もふくるよの雲ゐをわたる初雁の聲

山初雁

うきよともきこえぬ山の奥までは何かはかりのなきてきつらむ

初聞雁

初雁のなく聲きけばわかれにし春のつらさぞおどろかれぬる

朝鹿

をぐら山みねの朝霧たちならしゐもひつきせぬさをしかの聲

夜鹿

後亀山院千首和歌

なかなかに松の嵐のたゆむよはさやかに鹿の聲ぞきこゆる

原鹿

をじかなく秋のはぎはらかりにだになびかぬ妻をいつとかまたむ

海邊鹿

船とむるいそ山嵐ふくるよの枕にしかのこゑぞおちくる

田鳴

湊田の露にしをれてふす鳴のつばさふきほす秋のうら風

山霧

たちのぼる霧ふきはらふ木枯のよわれば見えぬ遠の山の端

河霧

朝日さす山は雲ゐにあらはれて麓をめぐるうぢのかはぎり

駒迎

ひきかへて都の秋にまちみばや雲ゐのよそのもちづきの駒

夕月

夕風の雲ふきはらふ中ぞらに出でてよをまつ月の影かな

岡月

夕づく日さすや岡邊の木の間よりまつほどもなくいづる月かな

橋月

かはたけの葉わけの風もさよふけて月すみわたる雲のかけはし

江月

しほ風のあらいそ松も音ふけて須磨のいりえにすめる月影

潟月

松浦潟かたぶく月を惜むとてもろこしまでもゆく心かな

都月

月はなほ同じ雲ゐをめぐりけり身にはへだつる都なれども

社頭月

後龜山院千首和歌

和ぐる光をそへて住吉のおまへのおきにすめる月かな（てらすと願べきやうむ）

故郷月

人のこずあれゆく庭はあとふりて淺茅が原に月ひとりすむ

井月

むすぶての雫にかげも宿りきて月ぞすみける（にぞすめる）山のゐの水

隣月

中垣のにしにや月のめぐるらむ我がみる庭ぞかげになりゆく

菊露

さき匂ふ菊の白露ひるはおきてよるは雪とやむすびかふらむ

谷菊

むすぶ手の雫ぞかをる白菊の花の露そふみちのしたみづ（たにか）

暮秋風

あすはまたかたみなるべきあきのいろをさそひなはてそ峯の木枯（もみぢば）（かく）

冬

嶺時雨

雲まよふ嵐のおとのさきだちてまだきしぐるる峰の松原

朝落葉

風さむみ朝日ももらぬ山陰に霜ながらちる木木のもみぢ葉

落葉混雨

ふく風や同じかたにとさそふらむ時雨につれてふる木の葉哉

山落葉

音羽山あらしふくらし逢坂の關のこなたももみぢちるなり

路落葉

うつの山こえゆく袖は色そひて嵐にはるるつたのしたみち

庭落葉

後亀山院千首和歌

たづねくる人もあらしの庭の面にこのはふきまく音のさびしさ

篠霜

風さむみ日影もみえぬ笹のくまにしばしは殘るよはの霜かな

谷寒草

山おろしのさそふ木の葉もうづもれて霜がれはてぬ谷のかげ草

原寒草

草の原それともみえぬ霜枯に秋の名殘をたづねわびぬる

庭寒草

むすびこし露のまがきはあらはれて霜の花さく庭の冬草

瀧氷

石ばしる波はくだけてたきつせの中なるよどや氷りそむらむ

池水鳥

池水のふかき契もしらるるはねをならぶる鴛のもろごゑ

屋上霰

袖の上にこれなむそれとみゆるまでねやの板間をもる霰かな（いたまもりくる玉あられかな）

古寺雪

さびしさは昔ながらの山なれやふりにし寺の雪のあさあけ

竹雪

三代へぬる竹のそのふの雪にこそふりにしあとも猶殘りけれ

松雪

みわの山杉の梢にゆふかけてたむけゆたかにふれる白雪

年内早梅

春をまつ軒の梢は雪ちりてうめが香寒き庭のゆふかせ

河歳暮

年波のながれてはやきみなの河つもりてのちや老とならまし

歳暮松

後龜山院千首和歌

雪ふりてつひにつれなき松山にまた年波のこえにけるかな

老後歳暮

ゆく年のをしきならひもさらに又おいての後や思ひしられむ

戀

寄雲戀

われゆゑにもえしけむりのするとだに夕の雲もたれかながめむ

寄霞戀

へだつなよ雲のいづくは霞むともわが思ふ人のやどのあたりは

寄霰戀

しるやいかに霰玉しくささの葉のつれなき色にくだく心は

寄嶺戀

けむりたちもゆとはみゆる富士のねのしたにこがるる思ならねば

寄谷戀

知られじな岩にせかるる谷水のわれのみしたにわきかへるとは

寄岡戀

せめて猶ふみだにかよへ水茎の岡の草根はかれはてぬとも

寄徑戀

なにとただせきこえてしも迷ふらむまたもあはづの森の下道

寄沼戀

もらすなよみくさがくれの沼水のおもひいでては袖ぬらすとも

寄瀧戀

せきあへぬ袖の涙やおちそめて衣のたきの名をながすらむ

寄河戀

貴船河あふせは神のこころぞと契るもしらで何たのみけむ

寄島戀

後龜山院千首和歌

うからましあかでわかれし妹が島さてもかたみのうらみのこらば

寄渡戀

かくとだにせめては君にしらればやむしあけの瀬戸にみは沈むとも

寄庭戀

たづねても訪ふべき人はたのまねど茂るはつらき蓬生の庭

寄井戀

忍ぶれば心ひとつにみちのくのいはではいかがやまのゐの水

寄閨戀

みせばやなふりゆくねやをもりきてもちぎらぬ月の影はよがれず

寄月草戀

人ぞうきわれのみ心つきぐさのうつろひやすき色をみるにも

寄蓬戀

たづぬべき
うらがる人のちぎりはあとたえて蓬が柚に通ふ秋かぜ

寄沼繩戀

沼水におふるねぬなは浮きながらたえなむことぞさすが苦しき

寄松戀

契りきやとはに浪こす岩根松つれなき色に袖ぬらせとは

寄杉戀

うきみよにふるの神杉つれなくやしるしも見えぬ人をうらみむ

寄檜戀

しひて猶おなじかざしと契らばや人の心をみわのひばらに

寄鳩戀

身にぞしむ人はこずゑの木枯に鳩吹く秋のゆふぐれのこゑ

寄千鳥戀

わするなよ一夜(ただうちうちとはま千鳥にて侵べし)うきねの磯千鳥またことかたに浦づたふとも

寄鷺戀

後亀山院千首和歌

足引の山とびこえてゆく鷺のいやとほざかる人にこひつつ

寄馬戀

くもゐをばつきげの駒にまかすとも隔つる中ぞかよふ方なき

寄櫛戀

ゆふげとふつげの小櫛もひくかたに思ひなされてまつぞはかなき

寄帶戀

行きめぐりするをたのまむ月草の花だのおびの中はたゆとも

寄繪戀

繪にかける形見ばかりは甲斐ぞなきつねにかくてはあるよなりとも

寄箏戀

つれなくや猶まつ風のかよふらむ人の心の秋のしらべに

寄矢戀

思ひいづる心のするもはかなしな石にたつ矢のためしばかりは

寄絲戀

うきふしに思ひみだるる白絲のしらねばこそあれ苦しき物を

寄木綿戀

契なきうき身のほどはしらゆふのかけても神を何うらみけむ

寄四手戀

わが祈る人の心と思はばや手向けむしでのなびきやすきを

寄注連戀

一筋にかけても神をたのむ哉なき名ただすの杜のしめなは

寄帆戀

知るらめや浦よりをちにゆく舟のほのみしままにこがれあふとは

寄碇戀

しられじな蜑の小舟のいかりなは沖をふかめて思ひいるとも

寄苫戀

後龜山院千首和歌

なみにしをれけむりにむせぶ類とは蜑のとまやをそれとだにみよ

寄網戀

思ひいでよなにはの沖におく網のまたこと浦に心ひくなり

寄繩戀

いつとなく浪にしをれて苦しきはあはでの浦のあまの釣繩

寄斧戀

をのの柄のくちしところに宿もがな人のつらさを知らですぐらむ

雜

杜柏

秋の色につれなくみえし柏木の杜のこのはも心とぞちる

蒼忍草

ふるさとの軒のしのぶは昔おもふ人の心やたねとなるらむ

名所澤

くみわけてたえじといひし廣澤のながれは世世にたちもこえなむ

名所沼

きくもうし淺香の沼にかつみふくあやめもしらぬ鄙のすまひは

鬻中峯

山高み見つつこえゆく峯の松かへりこむまで面がはりすな

鬻中原

月にゆくかちのの原の秋のよは宿のなきこそ心ありけれ

鬻中河

かへるさにまたやあひ見むはつせがは影をならべし二本の杉

鬻中海

蜑もすむ浦の苫屋にやどかりて枕に波のおとやきくらむ

鬻中潟

後龜山院千首和歌

なるみ潟みちもさりあへず滿つ汐にくれぬといそぐ浦の旅人

羇中里

故郷をふしみの原のささ枕むすばぬ夢はひかりなりけり

山家曉

嵐ふく松の軒端につきもりてねざめさびしき山陰のやど

山家風

さびしさも聞きなれなばと慰めておもひも入れぬ松風の聲

山家雲

雲ふかき山のかひよりくれそめて軒の梢にましらなくなり

山家雨

思へただ軒端の山も雲とづる柴のとぼその雨のゆふぐれ

山家苦

わすれめや松の柱にこけむしろしきしのぶべきすまひならねど

山家蟲

こひしとはたれかいひけむ山陰はひぐらし鳴きてさびしきものを

田家蟲

山里のそともの小田に夏くれてゆきあひのわせの螢とぶなり

春夜夢

したひえぬ花の面影うかびきて名殘こひしきはるのよの夢

曉夢

鐘の音によなよな夢はおどろけどその曉は猶ぞはるけき

雨中懷舊

ふりまさる音につけても戀しきは昔の人やあめとなりけむ

夢中懷舊

思ひつつぬればみし世にかへるなり夢路やいつも昔なるらむ

寢覺懷舊

おもひねの夢にみしかば近かりきさめては遠き昔なれども

懷舊涙

思ひいづる昔の御かげかき曇りなみだにしづく袖の上の月

懷舊非一

手を折りてすぎにしことをかぞへてもまづ歎かれぬかへりこぬには

寄日述懷

いかがせむしぐれて渡る冬の日のみじかき心くもりやすきを

寄月述懷

月だにもみちてはかくる影なるをあかぬぞ人の心なりける

寄星述懷

雲の上のうつらぬ星を北にみて南にむかふ身をはづるかな

寄風述懷

ともすればやぶるる物をふぢばかま心ゆるさじ野邊の秋風

寄雲述懷

いさぎよき心とならばなにかそのうかべる雲の跡はたづねむ

寄煙述懷

高き屋に煙をのぞむ古にたちもおよばぬ身をなげきつつ

寄露述懷

こころざし深くそめても敷島の言葉の花の露ぞ色なき

寄雨述懷

うきままに人をうらみぬ心こそ身をしる雨と袖にふりけれ

寄霜述懷

ふみわくるみぎはの霜をはらひてもかたき氷のためしをぞしる

寄道述懷

敎へおくひじりの道はあまたあれどなすは一つの誠なりけり

寄江述懷

後龜山院千首和歌

すみやらぬ世のことわりを思ふにも猶にごり江のみづからぞうき

寄河述懷

古にはやたちかへれ水無瀨河ふかき心のすゑのしらなみ

寄瀨述懷

くつがへす波の心を思ふかな浦こぐ舟のあとをみるにも

伊勢

神路山あふげば高くいづる日の上なくてらす光をぞみる

石清水

なにとなく濁りゆく世そ石清水ひとの國とは神もおもはじ

賀茂

雲わけてのぼる光の誓あればわがおもふことの末もたのもし

平野

色かへぬ平野の松にことはむ難波の春のむかしがたりを

三輪

いつかさて祈るしるしを三輪の山ことしもなかばすぎたてる門

玉津島

玉つ島ちりにまじはる光ならばかかるもくづも照さざらめや

如是作

何もみなまことの道にそむかねばしらでなすこそ迷なりけれ

如是樂

二つなくみつなき法の花をうゑてひとつさとりの身とやなるらむ

如是報

よしあしもわがうゑおきし種なれば人をなにはのうらみざらなむ

千手觀音

頼むぞよ千代のねがひをみつしほのかよふ粉河のふかき誓は

馬頭觀音

日のいづる色にかたちをたぐへてもうきよの闇をさぞてらすらむ

准胝觀音

へだてつる迷の雲やはれぬらむまた上もなきのりの光に

如意輪觀音

皆人のこころのままに導けよ世をすくふなる誓たがはで

寄日祝

日の本の國の光をあふぐらし數もかぎらぬよもの島島

寄月祝

天照すひかりならべて我が國のよるの守や月よみの神

寄都祝

雲はらふ風のちからも四方にみちぬ都のみゆき今やいそがむ

寄道祝

政たすくる四の道しあればかしこきあとにかへらざらめや

寄水祝

九重のみぎりをめぐるみかは水すみこし末はたえじとぞ思ふ

寄竹祝

さまざまに末ぞさかえむ百敷に枝をつらぬる園のくれ竹

寄鶴祝

うねの野やあすたつみちになくたづの千代にあふみの末ぞはるけき

和田英松氏藏寫本奥書

享德元年秋之中旬右筆本ノママニウツス誌焉

筆主生歳廿歳

天正六年卯月十四日以新葉集昨日引合所見南帝第三代御製に有之內拔書奉號後龜山院云云

法印眞性

後龜山院御製拾遺

うへのをのこども題をさぐりて百首歌つかうまつりけるついでに立春氷といふことをよませ給うける 新葉集

風わたる池の氷もとけそめてうち出づる浪に春やたつらむ

春の御歌 五百番歌合

出づる日の影も神代にかはらねば我が國よりや春はたつらむ

主や誰れとへどしら浪春たてば霞に染むるぬのびきの瀧

鶯の花待つほどのやどりかも春くるかたの庭のくれたけ

尋ねばや名におふ花も咲きぬらし梅津のさとの春をいかにと

いまだみこにおましましける時福恩寺前關白

内大臣家にありける梅の花を折りて奉るとて

「いと早もわきて手折らば春の宮に木高く匂へ
宿の梅が枝」とよみて奉りける御返し 新葉集

春の宮に木高く匂ふ花ならばわきてやみまし宿のうめが枝
山深く住みたまひける頃梅の花の咲きたるを
御覽じて 新續古今集

山深み人こそ訪はね咲きなばといひしばかりの宿の梅が枝
みこにおましましける時内裏にて人人題を探
りて百首の歌つかうまつりけるとき梅を 新葉集

幾千代も變らず匂へ植ゑおきて我が春しらむ庭のうめが枝
春の御歌の中に 新續古今集

春はまた我が住むかたに歸(いまゝゞイ)るなりあしやの蜑の衣かりがね
千首の歌めされしついでに花挿頭といふこと

をよませ給うける 新葉集

をさまらぬ世の人事のしげければ櫻かざしてくらす日もなし
花のころ嘉喜門院入内ありしにいそぐことあ
りとて度度とどめ申されしかどやがて還御あ
りける又の日はなを一枝奉らせ給ひけるつい
でに 同

惜むにもよらぬ別はうきものと君ゆゑ花や思ひしりけむ
春の御歌 五百番歌合

霞みゆく浦のしほやの夕けぶりその色となく春ぞさびしき
昨日まで見ざりし雲の立田山よはにや花の咲きはじめけむ
みよし野の雲ゐの櫻名にしおはばはやも都の春を見せなむ
幾春もちるといふことはしら雲のここのかさねの花盛かも
山吹の花さきぬれば池水のいひ出でがたき色ぞうつろふ

五百番の歌合に 新葉集

おしなべて山も青葉になりにけり(ぬなり(イ)) 花見し春は昨日と思ふに

あつめては玉(國(イ))の光となりやせむ我が窓てらすよはのほたるは(を(イ))

うへのをのこども題を探りて百番の歌合しは

べりけるに郭公を 同

ほのかなる寢覺の空の時鳥それともきかじ待つ身ならずば

中務卿宗良親王世をのがれてのち信濃の國に

侍りし頃たまはせ侍りし 同

時鳥そなたの空に通ふならばやよや待てととてことづてましを

夏の御歌 五百番歌合

天雲のよそにふりなで時鳥わがゐる山のかひになくらむ

立田川わたらぬ水もにごりけり三室の山のさみだれのころ

住吉の松に涼しくひびきて夕立すぐるむこのやまかせ

千首の歌よませ給うける中に岡薄を 新葉集

夕風になびく岡邊の花すすき入日をかへす袖かとぞみる

秋の御歌 五百番歌合

難波江や秋たつ波のうちつけに涼しくもあるか沖つ潮風

淺からぬ契もしるし天の川はしは紅葉のえだをかはして

萩の戸の花もや忍ぶおくつゆのことしげかりし秋の昔を

かすが山裾野のきりのたえまより尾上に高き小男鹿の聲

葛城やたかまのあらしさよ更けて雲なき峯に月ぞいざよふ

いつもすむ月を見るにぞ吉野山わが身の秋をしばし忘るる

秋をへて月やどれとや雲の上に露のうてなの名を殘しけむ

夜寒なる月のかつらの里人やねられぬままの衣うつらむ

春をおきて時こそありけれ吉野山さくらの梢色かはるころ

嵯峨の奥に住ませ給ひける秋の頃 新續古今集

後龜山院御製拾遺

思ひやる人だにあれな住みなれぬ嵯峨野の秋の露はいかにと

千首の歌めされしついでに 宗良親王千首

見てもまたほどなくあくる東雲にやがてまぎるるむら雲の月

夜ふくるまで月を御覽じて 新續古今集

見るからに慰めかぬる心とも知らずがほなる月のかげかな

五百番の歌合に 新葉集

風はやみしぐるる雲もたえだえにみだれて渡る雁のひとつら

中宮のいまだ女御にておましましけるころ嘉

喜門院に紅葉の枝を奉らせ給ひたりければ「君

がはや秋の宮居にうつるべきほどを紅葉のい

ろにこそしれ」と門院のよみ奉り給へる御返し

中宮に代りてよませ給うける 同

ちらでなほ千年の秋も色そへよはこやの山の峯のもみぢ葉

冬の御歌 五百番歌合

水莖の岡のやかたもうちしぐれ朝けの空に冬はきにけり

さそひゆく風の音さへかはりけり日數ふりぬる庭のもみぢば

うつろはぬ人の心のためしとやこの山路までのこる白菊

跡とめし岩のかげみち埋れて雪にさびしきみよし野の奥

星うたふ聲にもしるしちはやぶる神の鏡はただここにます

嶺雪をよませ給うける 新葉集

みよし野は風さえくれて雲間より見ゆる高嶺に雪はふりつつ

上のをのこども題を探りて歌合し侍りけるつ

いでに忍戀といふことをよませ給うける 同

ちらすなよ心の奥の忍ぶ山そむる木の葉のいろふかくとも

相互忍戀といふことをよませ給うける 同

これをさへつらき數にやかこたまし我れのみ忍ぶ思なりせば

契來世戀といふことをよみ給うける 新集

こむ世には廻りあふともいかがせむ契りおきける身ともしらずば

依忍難逢戀といふことをよませ給うける 同

逢ふことの障る方にもなれとてや忍べとのみは人のいふらむ

文中四年うへのをのこども題を探りて五十番の歌合し侍りけるついでに稀驚戀といふことを 同

何とかはまた木枯のさそふらむ身のみものうき袖のしぐれを

源氏物語の所所をよませ給うける御歌の中に 同

みるめなき恨は猶やまさるらむ蜑のすさびの間はずがたりに

五百番の歌合に 同

秋はつる三室の山の葛かづら恨みしほどのことのはもなし

戀の御歌 五百番歌合

尋ねばや思ひいる野の初尾花なびくはやすき習なりやと

忍びかねゆふべの雲にまがへても戀のけぶりや空にしられむ

また人の袖にやどらば月もみよかかる涙のたぐひやはある

しるらめや岩まにしげる蘆の根のねもみぬ人にみだれわぶとは

今は世になしともせめてきかればやさてだに人の哀しるやと

年なみのなほこえゆくはいかがせむいひし契のすゑの松やま

何とただとはれぬ宿の松かせは猶うきことの音をばそふらむ

なよ竹のよをや隔てむと思ふにぞうき節よりも袖はぬれけり

したひわびながらふべくもあらぬ身に又よと契る程のはかなさ

夢とのみ思ひなしてもあるべきを聞きしに似たる鳥のねぞうき

かきくもり袖の涙の玉ゆらにみし面影は身をもはなれず

しるしなきねのみなかれてうき人の心の花ぞ色かはりゆく

おきどころなくなく返す言の葉のその數ごとに忍びがたさよ

あふことはさて山陰の柴の庵しばしはなどかすまずなりぬる

源氏物語の所所をよませ給うける御歌の中に 新集

生ひいでし磯の姫松ひきわかれあさきねざしに濡るる袖かな

中務卿宗良親王信濃へ下りし道にて世を背き

けるよしきこしめされければ此の春千首の歌

の中に「今年ばかりの花染の袖」とよみたりし事

などおぼしめしいでらるるよしおほせられし

ついでに 同

わするなよ木曾の麻ぎぬやつるともなれし吉野の花ぞめの袖

うへのをのこども題を探りて百番の歌合し侍

りしに宗良親王判者仕うまつるべきよし仰せ

られしとき竹といふ題にてよませ給うける 同

かきすつる言の葉なれどくれ竹の園生の風にまかせてぞ見る

五百番の歌合に 同

今こそあれ住むべき世世の都鳥わが行末のことやとはまし

嘉喜門院御飾おろさせ給うて後は御琴なども

うち棄てられて年月を送らせ給うけるに天授

三年七月七日内裏にて御遊などありし時御聴

聞のため入内ありけるに御樂はてて後御琵琶

ばかりにて度度すめ申されしかば小樂ども

せうせうひかせ給うけるに年年の御遊のしき

など只今のやうにおぼしめしいでられて 同

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの秋おもほゆる嶺の松風

次の日よべのしきなど申されし御返事のつい

でに東大寺のねばかりぞ昔にもかはらぬ心地

して思ひいださるる事おほう侍りしままに猶

しひてものがれ申されざりしくやしさなど申
されて嘉喜門院「四の緒の調にそへし松風はき
きしにもあらぬ音にやありけむ」とよませ給へ
る御返し 新葉集

松にふく風はむかしの秋ながらなかばの月やおもがはりせし

天授三年三月十一日如意輪寺にて御佛事を行
はれけるが次の日各まかりあがれ侍りける程
懷舊の歌つかうまつりけるをきこしめして 同

四の時ここのかへりになりにけり昨日の夢もおどろかぬまに

世泰親王かくれ給ひて如意輪寺にをさめ侍り
し又の年從二位敎子かの寺に籠り侍りけるに
夜ふくるままに佛事の聲など松風にたぐひて
きこえければたまはせける 同

松かげを思ひやるこそこひしけれ千代もといひし君が心に

建德元年正月松契遐年といふ題を講せられ侍
りしついでに

十かへりの花さくまでと契るかな我が世の春にあひおひの松

みこにおましましける時內裏にて三百首の歌
講せられけるに寄日祝といふことを 同

久方の天の岩戸をいでし日やかはらぬ影に世をてらすらむ

千首の歌よませ給うけるとき大日を 同

六の塵あまねく照すひかりこそ三世につねなるさとりなりけれ

如是性といふことをよませたまうける 同

長き世のやみぢの雲ははれねどもものひかりは有明の月

雜の御歌 五百番歌合

皆人の心の種もかはらねば今もむかしの和歌のうらまつ

しづかなる心は猶ぞなかりける世を思ふ身の山のすまひに

さらぬだに苗代水のにごる世を心の川にいかがまかせむ

峯高き龜のを山の瀧つせのながれはたえじよろづ代までに

正平二十三年世の中りやうあんに侍りしころ

此の春移しうゑられし櫻の散りたる枝につけて嘉喜門院に聞えさせ給へる 嘉喜門院御集

植ゑおきし昔の人のかたみとて手折る櫻はおもかげもなし

天授二年やよひの初つかた嘉喜門院より御影堂の前の花につけて「九重に色そへてみよむかし思ふみのりの庭の花の一枝」と奉られける御返し 同

なきかげを花によそへて忍べどもこれもあだなる色ぞ悲しき

花にだに心はそめじ遠ざかる春の別のうきにつけても

文中二年霜月二十日ごろ雪いたう降り侍りし日去年の冬あさのにて御覽ぜられし雪のしきなどおぼしめし出づるよし申されて嘉喜門院「かきくらす峯の白雪それながらともに見し世の面影はなし」と奉られける御返し 同

思へただとふにつけても降る雪に見し世を忍ぶけさのながめは

正平三年倚廬の御所より嘉喜門院へ 同

思ひやれ見し面影もかきくれてなき人こふる袖のなみだを

元中九年神無月のころ吉野より京都に還御の道すがら立田川にて 池水屏

立田川うかぶ紅葉のゆくすゑは流れとどまることもあらじな

後龜山院中宮御歌

浦霞を　新葉集

佐保姫の袖しの浦の朝がすみたちかさねても見ゆる春かな

春の御歌の中に　同

うば玉の夜のみかすむ習ならば月にうらみや春は殘らむ

待花といふ心をよませ給うける　同

惜しきかな徒らにのみながめして花まつほどにうつる日數は

更衣惜春といへるこころを　同

いつしかとたちはかふれど夏衣心にのこる春のいろかな

吉野の行宮にて百首の歌よませ給うける中に

聞郭公といふことを　同

後龜山院中宮御歌

ききなるる山時鳥このごろやみやこの人は初音まつらむ

源氏の物語の言葉にてよませ給うける御歌の

中に新集

都にやまだいりたたぬ秋ならむ音羽の山は風ぞみにしむ

嶺紅葉をよませ給うける 同

みよし野の青根が嶺は名のみして時雨にうつる木木のもみぢ葉

年久しくなれさせ給うける人の遠きところに

侍りける秋の頃月を御覽じて 同

思ひいづるおなじながめの空とだに知られぬ月の影ぞかひなき

契後世戀といへるこころを 同

戀ひしなむ後の契もたのまれずあるを見るだにつらき心を

連夜待思を 同

頼めても空しき夜はにならひきて更けゆく月に袖ぬらす哉

遇後悔戀といふことをよませ給うける 同

汲みそめて淺き契の悔しきをいかにいひてかやまの井のみづ

題しらず 同

つれなくて過ぎこし方の報にや變るつらさを身に歎くらむ

正平二十四年の春吉野の行宮におましましけ

るを年月をへて後又かの山に行幸ありける頃

名所松といふことをよませ給うける 同

契あれば又みよし野の峯の松まつらむとだに思はざりしを

題しらず 同

かねてよりしられぬ物の悲しきはあるに任するゆく末の空

禁中の月といふことを 同

君すめば千年の秋もみかは水くもらぬ月のかげやどるなり

後小松天皇御製

立春氷といへることをよませ給うける　新續古今集

志賀の浦やよせてかへらぬ浪の間に氷うちとけ春はきにけり

六十番歌合に　菊葉集

谷の戸も春にあけゆく時ぞとやさすが道あるゆきの村ぎえ

明德四年の春伏見殿にまゐりて久しく侍りける頃ある所に梅のおもしろく咲きたりけるを御覽せらるる御ともにまゐりてあそび侍りしことを次の年の春去年の時わすれがたきよしうけ給はるとて梅が枝につけて從三位政子のもとへおくり給へる

後小松天皇御製

袖ふれし去年の匂を忘れずば思ひもいでよ梅のしたかせ

渡霞といふことをよませたまうける 新續古今集

紀の海や由良の湊の朝ぼらけかすみの庭に舟こぐらしも

見花 應永十九年正月禁裏御會和歌

おもかげの有明の空をちぎるかなみすつる花の木木のゆふぐれ

百首の歌よませ給うける中に 新續古今集

花ぞなほ峯よりおくに咲きそめて雲にあとなきしをりをぞする

三十首の歌講ぜられけるに庭落花を 菊葉集

春ふかき苔の緑にそめられて庭に色ある花のうすゆき

三十首の歌めされけるついでに 同

花もちり鳥さへ歸る夕山やかすみばかりに殘るはるかな

題しらず 同

行く春にともなはましを今日もなほ澤田の雁ぞかへりおくるる

更衣のこころを詠ませ給うける 新續古今集

よしさらばあだなる色を名にたてて今朝こそかへめ花染の袖

卯花似月 應永十九年正月禁裏御會和歌

むばたまの夢路にさかぬ卯の花もやみのうつつの月と見えつつ

野外夏草 新續古今集

みゆきせし千代の古道あととぢてただいたづらに茂る夏草

夏の御歌の中に 同

今年おひの竹のさえだの短夜に葉わけの月も見るほどぞなき

初秋風 應永十九年正月禁裏和歌御會

みそぎせし袖の名殘の川風や秋のひなみを今朝はかくらむ

新秋雨 五十首續歌

風の音は目に見ぬ秋のならひとや露にしらするけさの村雨

二星適逢

後小松天皇御

誰が中のおこたりならぬうとさにも秋のならひのうき一夜かな

袖上露 五十首 續歌

野邊に見し尾花ばかりと思ひしにうき身の袖の露もおとらず

百首の御歌の中に海月 新續古今集

秋の夜の月にや拂ふわたつみとあれにしままの床の浦風

禁中月 五十首 續歌

月もいかにおもがはりせず思ふらむ今年もなるる雲の上の秋

谷月 應永十九年正月 禁裏御會和歌

長き夜もはるかに月やふけぬらむ谷のとぼそに影のさしいる

義仁法親王月のころ栂尾よりまかりいでて內裏近きところに宿りて終夜琵琶を彈じ侍りけるを遙かに聞しめして仰せごとありける 新續古今集

弓張のなかばの月の影よりも猶すみまさる四つの緒のこゑ

二十首の歌めされけるついでに擣衣何方といふことをよませ給うける 同

片絲のよるの衣を擣つ音はこなたかなたの里もさだめず

伏見殿の前栽に菊をつくられて侍るを枝を折りて賜はるとて從三位政子のもとへ 菊葉集

うゑたてて さこそ匂もまさり草山ぢの種はみるかひやなき

從三位政子みやこの紅葉を折りて伏見なる人の許へ「此の枝に都のこずゑ思ひやれさこそ紅葉はながめたるとも」と申しおくりて侍る返事を女房にかはりて御返し 同

手折り見する情もふかき紅葉ばをいかがなべての色にくらべむ

初冬時雨 應永十九年正月 禁裏御會和歌

たへざりし秋の梢はさもあらばあれ袖色みするけさの時雨に

後小松天皇御製

題不知 菊葉集

庭の松はらふあらしに雪きえて月は軒ばの山をいでけり

入道前左大臣伏見殿へまゐりて侍る折ふし雪のふりて刈田のけしき面白くみえければ「稲葉にも猶まさりけりはるばるると刈田の面にふれる白雪」とよみて後に奉りける御返し 同

言の葉のふかき情に色ぞそふ刈田のゆきはながめ馴れしを

寒月 應永十四年十一月二十七日 内裏歌合

霜枯のころさへ月のやどりにて千年の影ぞ松にのこれる

浦雪 同

つぎて(しひて)ふるわが名もかけよ和歌の浦の玉藻の雪のあとの白波

初戀のこころを詠ませ給うける 新後古今集

思河いはまの浪のうちつけにせきあへぬ袖の玉ぞ碎くる

寄瀧戀といふことを詠ませ給うける 同

いつよりか妹せの中におちそめて吉野の瀧を袖にせくらむ

相互忍戀といふことを詠ませ給うける 同

しのぶ草葉末のつゆの亂れあひて消えばきゆべき限をぞ待つ

寄鳥戀といふことをよませたまうける 同

面影をよそに見つつややま鳥のはつをの鏡へだてはつべき

寄傀儡戀といふことを 同

また結ぶ契もしらで消えかへる野上の露のしののめのそら

忍切戀といふことを 菊葉集

色にいでむ涙こそげに限ならめ命をきはとしのぶ思は

題しらず 同

いかにして人の袖をも染めてしる千しほの涙いろにいづべく

三十首の歌講ぜられし中に聞戀を 同

後小松天皇御製

中中にたよりの風もあぢきなしききて慰むゆくへならぬに

六十番歌合に 菊葉集

逢ふとみつる夢をさへ又おどろかすようきは別の鳥と思ふに

おなじ歌合に寄船戀 同

しづめただよるべもなみの捨小舟ひとのうきせに何かただよふ

三十首の歌講せられし中に 同

あやにくにまつ夜はふけし鐘の音の別になればなどいそぐらむ

不會戀を 同

面かげも忘るばかりに隔てきて又とみぬよの夢ぞあやなき

寄時雨戀 五十首續歌

しぼりかねふるとな見えそ村時雨とめてたもとの色はそむとも

寄雲戀 題永十九年正月禁裏和歌御會

心にもかけてなほきくゆふべかな雲路のすゑの入相のこゑ

寄宿木戀 同

つれもなきゆくへぞ色もかはりける松とは知らぬつたのもみぢ葉

山家友といへることをよませ給うける 新續古今集

猶ふかく思ひもいらば山里の友をも捨つる世とやなりなむ

旅宿のこころを詠ませ給うける 同

かりしくも薄き尾花の袂かな松がねさむき露のまくらに

五十首の歌講せられける中に 菊葉集

わけすぐる山より山の旅衣なれゆく袖をつきもわするな

月の御歌の中に 新續古今集

雲居よりなれにし月のかひもなく身を照すべき時もすぎぬる

百首の御歌の中に 同

むしろ田のいつぬき川の河水と住むてふたづといづれ久しき

位におはしましける時百首の御歌の中に曉寢

後小松天皇御製

覺といふことを詠ませ給うける 新後古今集

この頃は鳥のつかさも告げたえてわれと驚くあかつきの夢

曉眠易覺 應永十九年正月禁裏御會和歌

われならで千里のほかの枕までねざめせざらむ夜の氣色かは

百首の御歌の中に 新後古今集

あはれなり小田もる庵におくかびの煙や民の思なるらむ

竹爲師といふことを 同

九重や庭のかはらねば代代の跡あるしるべとぞ思ふ

神祇 應永十四年十一月二十七日内裏歌合

あしかびとみえし形をはじめにて國つやしろの神のかしこさ

淨土の法文など聞しめしけるついでに嵯峨の奥に往生院といふ寺のあるよし人の申しければ詠ませ給うける 新後古今集

皆人の行きて生るるやどりこそうき世のさがの西にありけれ

權中納言清長身まかりて後手ならし侍る扇を御覽じて年久しく仕うまつりける事などおぼしめしいでて 同

殘しおく扇の風もかなしきは別れし草のかげのしらつゆ

明德四年三月内裏にて松契萬春といへる題を始めて講ぜられけるついでに詠ませ給うける 同

みどりそふ大内山の松の葉はやほよろづ代の春の數かも

應永十五年の春北山殿に行幸ましまして花契萬年といふことを 北山殿行幸記

よろづ代となべて花には契るとも春へむとしぞ猶も限らじ

中納言雅縁日ごろ煩ひて内にも久しく參らざりけるがいささかおこたりぬるよし聞しめさ

後小松天皇御製

れて 池水屏

月もはややや出でぬべき光かなはれゆくかたの空に任せて

百首の御歌の中に獨述懷といふことをよませ給うける 新續古今集

あきつばのすがたの國と定めおきし大和しまねのそのかみを思へばひさにへだたりてあまのかぐ山いづる日のとこやみなりしほどもなく晴れてさやけき神代よりみもすそ河のすみそめてともに濁らぬいはしみづながれは遠くなりぬれどこの身違はず四つの海の波ををさむる名をかけておほうち山のまつの葉の年のかずのみつもれども民をしすくふひとことも難波のあしのみごもりに何のふしだにあらはれずされど心にをこたらず世を思ふ程は

ひさかたの空に知らむといくめぐり經にける方をいつたびの春あきにこそすべらぎのやすみしるてふ越えぬればさやのなか山はづかしの杜のしたぐさいにしへの世にもかへさぬいたづらになす事もなきをりをりの情はありと折りまよひ和歌の浦路のはかなさに色をも香をもみがくるいはと柏となよたけの世の人はみなあふぎつつ雲居の月のかぞふれば二十年あまりなりにけれこれを思へばちかき世のためしにさへもなかなかに愚なる身をふみわけてさらば道あるなげきのみつもる月日はながめして花ももみぢも知りながらかつらの枝も玉藻をもかきえぬほどのしらなみの吉野のかはにうづもれてはるけむかたもなつびきの絲のひきびき

後小松天皇御製

みだれつつ寄りもあはねば　たれにかは心をよせむ
をばかりによろづの事の　いぶせくて秋の木の葉の
散り散りにその色としも　おもほえぬ筆のすさびは
つゆほどの光も見えぬ　うらみさへ忘れはてつつ
いり江なるかげの藻屑を　かきあつめぬる
思ふことを誰れにいはまし藻鹽草かきつめてだに慰みやせむ

後小松院御百首

春二十首

立春

たちかへる神代の春やしるからしたかまが原に霞たなびく

山霞

富士のねの雲ゐにまがふ煙よりしたにかすみて春やみゆらむ

浦霞

春やさてみるめもなみにまがふらむ霞をかづく伊勢の蜑人

若菜

春淺み若菜はまだき野邊に出でて雪みむためと人や思はむ

梅

袖になほあまらぬ程は梅が香のまたむせびくる春の夕風
うつしてはまづわきかねぬ梅が香もしみふかき夜の袖の月影

河柳

青柳の枝こす波の谷川やすゑはかけひの軒のいとみづ

歸雁

たが爲のつらき別ぞ空なきのこゑしてかへる春の雁がね

春月

はれぬべき恨はいつの春ならむ今年も月のまたかすみぬる

春雨

人しれずまたるる花のかぞいろとはやなつかしき春雨ぞふる

花

吉野山たかねの櫻さきいでて及ばぬ雲のいろになりぬる
秋の夜の月とはいはじ春ごとの花にめでても老となるもの

ちる花のうき世を人の歎かずばたが身の夢としられざらまし

春曙

花もなく月も殘らぬ頃をしぞおのがものなる春のあけぼの

苗代

苗代のあせもしどろに行く水のすみもさだめずなく蛙かな

野雉

霞たつ末野のきぎす狩人のあとを命とねをやなくらむ

躑躅

春雨に笠とり山の岩つつじひかげの色にてりかへてけり

松上藤

相生のまつに契をかけしより藤の千とせや春にそふらむ

里欵冬

春の色ぞわづかに見ゆる故郷に人もすさめぬ庭のやまぶき

暮春

人なみにあくがれきても本の身のうきにかへれと春やゆくらむ

夏十五首

新樹

枝かはす木木にもわきて青によし檜の廣葉やまづ茂るらむ

卯花

夜もすがらまがへし月は影きえて雪をまことの今朝の卯の花

時鳥

我れをまつならひもあらば時鳥こぬよのうさや思ひしらせむ

雲はやみふりくる雨の足引の山ほととぎすわたるひとこゑ

菖蒲

ねをかけぬ誰が袖ゆゑに殘りきて沼のあやめの露こぼるらむ

五月雨

ふりて世にすむかひもなし五月雨の雲のそこなる有明の月

里椿

時鳥ただは過ぎじと見えてけりあふち木暗き里のをちかた

庭橘

夢さめて昔もとほき手枕にわすれがたみの軒のたちばな

夏月

それならぬ草木にすむもいかならむいざさをざさの短夜の月

夏草

夏草のふかきこころの色ながら跡(本ノママ)の道にまよふはかなさ

照射

妻戀の秋にもならば思ひしれしか待ちあかすしののめの空

鵜河

後小松院御百首

うきしづみ哀にもゆるかがりかな鵜舟の後のゆくへしらずも

夕立

夕立のなごりながらも朝日やま日かげは峯にさしのぼりつつ

晩蟬

木の間もる日かげやうすき鳴く蟬も下枝にうつる夕暮の聲

荒和祓

御祓するぬさのみだれは取り捨ててそよやかへさの袖の秋風

秋一十首

初秋露

袖のうへまくらの下もうちしをれわきえぬ秋のつゆの明暮

七夕

ただ一夜そでほすゆゑぞみなし川秋よりさきの名には流れじ

萩風

吹きむすぶ軒ばの萩の露ながらきえゆく夢のあとの秋かぜ

野外萩

おく露もふかくや秋のなりぬらむ野邊の眞萩の花かはるまで

薄

こと草はさきこぼれても花薄なびくすがたに似るものぞなき

女郎花

摺衣それにはあらぬ女郎花など山あひに咲きてみゆらむ

蟲

おもひありと聞きふすからに秋の夜のふくるは悲し松蟲の聲

秋夕

やよしばし軒のひと葉の夕あらし袖の涙のもろさくらべむ

深夜鹿

後小松院御百首

等閑のさよのねざめのものぞとや涙をもみぬさをしかの聲

江鶉

あしたづの尋ぬるあとか濱川の入江の波に鶉なくらむ

月

月いづる大和島根もうかぶなり浪もいなみの海の夕なぎ

姨捨や入りぬる月の跡までもながめはあかぬ山のはの月

身をてらす影ともあふぎ憂き事をかこつもおなじ秋の夜の月

暮天雁

折しもあれ聲も色にて渡るなりとよはた雲の衣かりがね

朝霧

たちのぼる霧より上にしぐれけり朝露はらふ峯のまつ風

擣衣

夜やさむきうつや衣をしきたへの袖にかさぬる秋の里人

紅葉

庭の草野はらの淺茅うらがれて木末にうつる秋のいろかな

龍田姫おもひの色の秋ごとにしのびもあへぬ木木のもみぢば

雛菊

おき迷ふ雛の霜もふかき夜の有明の月のしらぎくのはな

暮秋

しをれしはことの數にもなみだ哉いまはの秋の袖の夕ぐれ

冬十五首

初冬

かみな月立田の山の雲風も木の葉にまがふ色ぞさびしき

山時雨

しぐれつつ暮れて昨日の秋篠や外山の雲のうつりやすさよ

後小松院御百首

落葉

さらば又染めもつくさでそのままに薄きもはてはしく木の葉哉

枯野風

道のべの尾花もかれて旅人の袖をせばしととふあらし哉

江寒蘆

見るままに難波江遠くなりにけり汀のあしの冬枯のころ

千鳥

松たてる磯の浦風さえぬらし由良のとなみに千鳥しばなく

池水鳥

くるるまで池のささ波たつ鴨のおりゐる夜半は氷してけり

冬月

あだにしもうきみの袖を頼むかな草木かげなき冬の夜の月

雪

ふりにけりすがらにさえし小夜衣うらめづらしき今朝の初雪

尾上なる松よりあまる程なれや山下里の軒のしらゆき

いかばかり河せの浪も氷るらむ林の雪のゆふぐれのそら

鷹狩

面影もたえていく世になりぬらむ野守のかがみうけし行幸は

神樂

神さびてうたふゆだちの本末もよりあひの音のいづれともなく

炭竈

すみがまの煙にぎはふ里みえて民のかまどのひまぞしらるる

除夜

とにかくに身にもおぼえぬ年くれてなやらふ夜にもなりにける哉

戀十五首

後小松院御百首

尋緣戀

いかにせむ世語ならずなしはてて傳へむ人のあはまほしさに

初戀

いつのまに染めける色ぞ初紅葉われだに露もしらぬしをれに

忍戀

色にみえ袖にもあだにちらすなよしのぶの露はおきあまるとも

聞戀

思ひあまり名もたちぬべく苦しきに聞きおとりせば嬉しからまし

見戀

かくばかり袖をかはさぬ中だにも靡くならひはありとしらなむ

祈戀

きえかへる命を神にまかせても涙のつゆのかかるしらゆふ

不逢戀

等閑におもふ色とは疑はじうたてもなどかつれなかるらむ

契戀

あだならず我れこそ契れおくの海のいさしら波の末の松山

待戀

このままにさしてゐる夜の槇の戸にあけていかなる心ちかはせむ

逢戀

今宵こそぬれし袂もひたち帶の心もとけてめぐりあひぬれ

遇不逢戀

さだかなる現にだにもわかざりきされば戀しき夢の契よ

通書戀

玉章のそのはしがきのつれなさを思へばしぢのまろねせよとや

惜別戀

更にこそゆるしもやらねまたとだにしらではかなき袖の別路

顯名戀

うき名のみおしあけがたのならはしにまたや忍ぶと夕暮の空

恨戀

うつりゆく松のひびきの絶えしより身をあき風の末の眞葛葉

雜十五首

曉鐘

世の中の夢もしばしと殘りけりあかつきごとの鐘のひびきに

名所山

ことの葉も麓のちりのかずとだにつもらばゆるせ玉つしま山

名所浦

田子の浦やおきつの波は遮莫(さもあらばあれ)ふじのけぶりぞたたぬ日もなき

古松

名にしおふそのかみよりや千年山峯なる松も生ひはじめけむ

栽竹

呉竹のはしに我が身はなりぬともうゑてや世世の影を頼まむ

幽徑苔

山里の下樋に水の道はあれど上なる苔を人はかよはず

鶴

今ははやわが身ふりゆく霜の鶴くもゐにおよぶ色ぞかひなき

鷺

まがひつつ頃しもわかず飛ぶ鳥の鷺坂山にふれるしら雪

河舟

日くるればこもかり舟ものぼるなりかへさやいそぐ淀の里人

旅宿

野邊の露はたがならはしと結ぶらむ夢もとまらぬ草の枕に

旅泊

みやこおもふ夢もなみだにまよふなり宿かる月も袖にくだけて

山家

あはれなる花の盛も杉のいほにすむ人ありとみ吉野のおく

海眺望

名もとほき難波のみやの跡とては高津の海の末のしらなみ

述懷

身の程に身をもくらぶる身なりせば愚なる身を良とやたのまむ

寄神祝

蘆原の國とこだちの初にて幾代をまもる神となりけむ

後小松院御百首和歌

春二十首

關路早春

佐保姫の袖の色のみ名にとめて霞のせきをゆるす春かな

湖上朝霞

朝ぼらけからろの音はすはの海や舟こそみえねたつ霞かな

霞隔遠樹

逢坂のせきの杉村かすむ日はおとはの山にはるかせぞ吹く

鶯中聞鶯

鶯のこゑするかたのやどりをやこよひかりねの梅のした道

幽栖竹鶯

春雨もふりくれ竹のしをりがきころもしをれて鶯ぞなく

田邊若菜

かるとみし稲葉の雲の秋の色も雪間にかへる若菜をぞつむ

野外殘雪

春の色やいたりいたらぬ若草もなほ雪ませのむさし野の原

山路梅花

梅が香のうつれる袖ははらはじよ山路の菊のつゆはありとも

梅薫夜風

手枕のこすのすきまのはる風はたのめぬ袖のむめのうつり香

水邊古柳

春ふりてよわき柳のおちがみをけづるなさのみ櫛田川かせ

雨中待花

とけよはや櫻が枝の春雨につゆをむすべるはなのしたひも

野花留人

おほかたに一夜ねなむと思ひしは花よりさきの野邊のあらまし

遠望山花

かりにだにいかでやどらむはしたかのと山の嶺の花のした蔭

曉庭落花

いくよまでとまらむものぞ散る花に有明うすき庭のおもかげ

故郷夕花

ふみわけし春はむかしの故郷にゆふべむなしき花のしらゆき

河上春月

水無瀬川ながれし花も色さびて春をふかむるありあけの月

深夜歸雁

いかにうきたがきぬぎぬもまだしらず鳥のねまたで歸る雁がね

藤花隨風

後小松院御百首和歌

紫のゆかりをまつのかせなれやなよびてかかるはるの藤波

橋邊欵冬

いはぬ色の山吹の瀬の花ぞめにころもやふかき宇治のはし姫

船中暮春

ひきとめぬ春の浪路のあとくれて袖のみなとに殘るうき舟

夏十首

卯花隱路

人しれぬわが通路の卯の花は咲きていつより關となりけむ

初聞郭公

たがためも今や初音のほととぎす人まつとだにきかぬ夜ごろは

山家郭公

あやまの中にむすべる庵ちかみむべもこがくれなく郭公

池朝菖蒲

さ浪たつ池の朝かせすずしくてあやめの末葉つゆこぼれつつ

閑居蚊火

山本やたてしゆふげの煙よりなかなかふかき夜半のかやり火

廬橘警夢

たち花のかをる枕はみじか夜のあくるをまたで夢ぞわかるる

杜五月雨

ふりはへて問ふべきかたも思ほえず生田の森のさみだれの頃

野夕夏草

かけて思ふしげみの露の色なれやしをれむ花の野邊の夕暮

澗底螢火

とぶほたる光や花となりぬらむあらはれわたる谷の埋木

行路夕立

さしてゆくこの袖がさもほすばかりあとになりぬる夕立の雨

秋二十首

初秋朝風

袖せばき麻のころもの朝風ややがて身にしむ秋をしるらむ

閏月七夕

あまの川いなにはあらぬ中ならし後のふづきのこの月ばかり

野亭夕萩

やどりする人やとふらむ驛路のすずのしのやの萩のしたかげ

江邊曉萩

しをればの萩さへまじるながれ江のみぐさもくらき有明の月

山家初雁

山こゆる雁の涙のはつしぐれこずゑにそそぐ軒のしたつゆ

海上待月

よひのまのあまの漁火ややきえて月の出じほのほどぞしらるる

松間夜月

山おろしの松よりうつす月は見じしぐれせぬ夜の袖しなければ

深山見月

秋さむきみ山おろしに月たけてたがささ枕つゆくだくらむ

草露映月

露ながら花みむとのみか心して月なこぼしそ野邊のあきかぜ

關路惜月

清見がた月はとまらであくる夜になき名たちゆく浪の關守

鹿聲夜友

なかばまた涙もおちよ夜半の鹿わが手枕のつゆもこそあれ

田家擣衣

門田なるおしねもいまやかり衣うつ音さむきあきのゆふぐれ

古渡秋霧

をちこちのかぎりもいかでみわの崎佐野の渡の秋のゆふ霧

秋風滿野

秋風やおよびてなほもはらふらむやたのひろ野の末の白露

雛下聞蟲

おきわたすまがきのつゆの雫まで涙にうくるまつむしのこゑ

紅葉瀉水

水の面をそめこしてこそ村時雨そこにもみぢの色はみゆらめ

山中紅葉

うすくこきもみぢの色のから錦たたみかけたる秋のやまかな

露底槿花

たまりける夜露の末のひとふさにぬれ色ながらのこる朝顏

河邊白菊

白妙の袖をばかけぬ佐保川(の)になみをあやめてさける菊かな

獨惜暮秋

人はなほ秋の山邊にまじれどもひとりいまはの秋のゆふぐれ

冬十首

初冬時雨

神無月けさたつ空のくもはやみしぐれもまなきこがらしの風

霜埋落葉

松の上の落葉を霜はうづむともしたにみえすく色はかくさじ

屋上聞霰

賤がすむ板屋かややに音かへてふりみふらずみちる霰かな

古寺初雪

みわたせばはや初雪ぞちる寺のかはらの松も色かはるまで

庭雪厭人

葎生の八重よりやへの庭のゆきはあとつけがたし門させりてへ

海邊松雪

なにはがたみつの濱松雪にみていづれふりぬる色としもなし

水鄕寒蘆

みしま江や玉江の浪のこほるよりかれたつ蘆のかげもゆるがず

湖上千鳥

浦の名のにほのうきすのあととめてこれをも友と千鳥なくなり

寒夜水鳥

あられふる玉もの床の水鳥はよはのおもひのくだけてやぬる

歲暮澗氷

松山の谷の氷はゆくとしのくれをもしらでなどよどむらむ

戀二十首

初尋緣戀

したもえのおもひの色のはつみどり末葉みだすなもずの草ぐき

聞聲忍戀

うつつともわかぬ初音のほととぎすあとの雲路にまどひぬるかな

忍親昵戀

よそ人にむすばれぬとも言の葉の露やはかけむ野邊の若草

祈不會戀

いたづらにたがみそぎとかなりぬらむあはぬ浮名の立田川波

旅宿逢戀

ひき結ぶはな野につゆの草枕あけてや色のあだにうつらむ

兼厭曉戀

後小松院御百首和歌

思ふぞよさはらぬ月のよひのまも身をうぢ山のあかつきの空

歸無書戀

道芝の露のなごりのたまづさをいかなるかたにまづ結ぶらむ

遇不逢戀

かかるべき涙のはてとおもひにき夢のまくらのありしうたたね

契經年戀

おもひでよかけてまつちの山松の色はつれなき苔のみだれを

疑眞僞戀

たえせじといひわたれども瀨をはやみそこひも知らぬ中川の水

增返事戀

もしほ草浪のかへりにうけひきてまた迷ひゆくあまのたく繩

被厭賤戀

西の海あらいそなみの玉かつらかけし鏡の神もうらめし

途中契戀

つつましや行手の人もあふみぢのしのに隙なきしののをふくき（本ノママ）

從門歸戀

叩きてもかひもあらじと立ち歸る門のかためのつよき夜半かな

忘住所戀

高安やその里の名もたどられぬふりわけ髪のながき契に

依戀祈身

かくばかりうきみなりけるさきの世を現す神のしるべともなれ

隔遠路戀

逢坂はきくをせめての名のみして忍ぶのおくにまよふばかりぞ

借人名戀

身をしれば木の丸殿の習だにただよそ人にまぎらはしつつ

絕不知戀

後小松院御百首和歌

つひにさてほかゆく浪にひきたえてあとだにとめぬ蜑のすて舟

互恨絶戀

うらみしをうらむるよしのかごとのみ殘る形見のなれるはかなさ

雜二十首

曉更寐覺

夢にみえ寐覺にのこりいくたびか曉たのむ代代のいにしへ

薄暮松風

岡のべの里の煙を姿にてあらしにうときまつのゆふぐれ

雨中綠竹

青葉なる竹はまだらにみえねどもたが涙とか雨しぼるらむ

浪洗石苔

あらふなよ苔のいは根の瀧つ浪うき世きかじの耳はありとも

高山待月

めぐりあはむこむ世もがなや高野山そのあかつきの有明の空

山中瀧水

しげ山の岩根づたひにむすびつつ流れもやらぬ瀧の音かな

河水流清

まもるらむみもすそ川とたのむよにすむやかしこき水の白浪

春秋野遊

わすれずよ朝の原のさくらがり小鷹する野の秋のゆふぐれ

關路行客

この頃は鳥のそらねもまねばねば往來ややすき關の旅人

山家夕嵐

すみぞめのゆふべの袖ははやほしぬ吹きなしをりそ軒の山風

山家人稀

後小松院御百首和歌

そをだにや友とみやまの松の庵一□のすみかならべよ

海路眺望

あとになる浪間の舟よおもひしれ興津の松のうれをこえぬと

月翳中友

故郷のおもかげとめてむかへどもまたかきくるる月の顔かな

旅宿夜雨

雨よりも心なしとやかこつらむおもはぬやどのさよの里人

海邊曉雲

よごの海やよこ雲ながらつれにけり引手をいぞく磯のいで舟

寄夢無常

心からうつつにだにもまよふかな夢のうき世をいでがてにして

寄草述懷

釉にまよふ涙はつきぬうき世かな岸なる草の根をはなれても

寄木述懷

ふりにけり思へば和歌のうらめしやなど色しらぬ松の言の葉

追日懷舊

こしかたはかく忍ばむと思ひきや老の心ぞあはれはかなき

社頭祝言

日とてらし土とかためてこの國を内外の神のまもるひさしさ

後花園院御製和歌集 上卷

撰歌百首

春二十首

立春

朝ひこはささぬさきよりあら玉の年のひかりぞ四方にみちぬる

山霞

かげ高き松の尾山のはるばると霞むや千代のはじめなるらむ

海邊霞

清見がたしほ風よわくかすむ日にみどりすくなき三保の松原

鶯

うちつけに花になくとや白雪のふる巣こづたふ鶯のこゑ

野若菜

いく春か故郷人をみよし野の名のみ老いせぬわか菜つむらむ

梅風

この頃の風のにほひになしはてて花にはうすき四方の梅が香

柳

春にいまあはずばなにを玉柳くち木の枝の色にみせまし

春月

今年なほおぼろに見るはこれやこのつもりし老の春の夜の月

春雨

花ならぬかぞいろなれや春の雨の養ひえたる野邊のみどりは

歸雁

わかれても雲路急がぬひとつらやなれも名殘の春のかりがね

早蕨

家つどといまぞみやまの下蕨手ごとに折りてかへるしばびと

栽花

花をまつ宿の若木のゆく末に誰がしるべとてうつし植うらむ

尋花

われならでわけ入る山の山守もまだ見ぬ花といはばいはなむ

盛花

見るままに下折れぬべき枝もうしつもりなそへそ花のしら雪

挿頭花

さらに今花やかざさむ百敷の春よりさすがいとまある身に

落花

風よりもまづや恨みむちることのあだなる花にそめし心を

苗代

思ふぞよ小田にまかするなはしろの水の心もすみがたき世を

歎　冬

夕ぐれのまがきの色のひとしほや月もほのめく山吹のはな

藤

色かはる名にやたへまし紫の花のなみこすまつのふぢが枝

暮　春

くれてうき春の日數は長しとも思はで人のしたふころかな

夏十五首

更　衣

花ぞめのかたみのこさぬ夏衣そでとふ風もはるやこひしき

葵

いまぞみる卯月のかつらをる枝にかかる葵のつゆのひかりも

待郭公

さそふべきたよりと思へば村雨もまたるるものか山時鳥

郭公遍

なれもいま心のままやなくころの四方にとだえぬ時鳥かな

菖　蒲

池水のあやめわかれてひとかたに葉ずゑなみよる朝風ぞ吹く

橘

かたしきてぬるや常世の花の香にしらぬ昔を袖にしめつつ

五月雨

濁あるなみの玉ものうちなびきそれと知られぬ五月雨のころ

夏　草

花さかぬしげみがそこの草の名もあらはれぬべき秋やまつらむ

夏　月

夏ぞなほ心づくしはしげ山の木の間すくなき月のひかりに

蚊遣火

夕煙むせぶよそ目もうきわざと思ひしらぬや賤がかやり火

螢

夜半にこぐたななし小舟數見えておなじ堀江にとぶ螢かな

池蓮

朝ごとにうつるもきよし蓮葉の花のためなる池のかがみは

夕立

山の端の雲のとだえにうつる日のひかりを洗ふゆふだちの雨

納涼

草がくれ露さへ結ぶ山の井のあかでやここに夏をくらさむ

六月祓

もろ人のこころのちりも夏川に流しすつべきみそぎなるらし

秋二十首

早秋

雲のいろもかはるあさけのをぐら山げにや西にぞあきの初風

七夕

天の川うきつの雲のうす衣つま待つよひはさぞなうれしき

荻

聞けばうきおもひやなぞとことわればただ身をしをる荻の上風

萩

我が身いまよそに砌の萩の戸にありしながらや花は咲くらむ

女郎花

なびきふすまがきの外の女郎花いかなる風の誘ひいでけむ

叢蟲

露さむみこれかれいそぐ淺茅生にいまいくよとか松蟲のなく

初雁

きつつ鳴くあさけも寒し秋山の木の葉いろづくころもかりがね

田鹿

けだものののぼりし空にあらぬ田の稻葉の雲に鹿も鳴くなり

秋夕

身にしめてうしともいはじうさはただ老に限らぬ秋の夕暮

山月

小夜深き細谷川にうつりきて月影たかしきびのなかやま

橋月

朽ちもせぬ名にたつ秋のはしばしら昔ながらの月をのこして

浦月

みるめかる我れをばよその波路にて浦より遠に月ぞかたぶく

社頭月

あひにあひて月もここにや住吉の神のみしのめ長きよの空

古寺月

この寺に三世の佛やすむ月もちらすひかりをはなたてまつる

曉鳴

さらでだに秋の寐覺はうき數をうたてもそふる鳴のはねがき

擣衣

とほつ人まつよの秋のから衣身にしむ月にいまかうつらし

河霧

最上河なみのいづくにいな舟のぼるせくらき秋の夕霧

菊

移しうる菊は山路の種しあれば千歳の秋にあはざらめやは

紅葉

何にうきおもひの色ぞ山姫の涙しぐれてそむるもみぢば

九月盡

今ぞ知るわかるる秋の夕まぐれうきをも慕ふならひありとは

冬十五首

初冬

あらましき風のたよりも四方山の木の葉ときませ冬はきにけり

時雨

晴るるぞと見えつる空もいつはりの空の名たてに降る時雨哉

落葉

目に見えぬおのが姿もこの頃の落葉にしるくゆくあらしかな

霜

冬枯はおのがしわざの草の原なにいまさらの霜の花ぞも

寒蘆

こころあらばあはれとや見む海士のすむ難波の蘆の冬枯の色

冬月

大あらきの森の下影照る月のさゆるひかりはひともすさめず

氷

むすびそふみぎはの氷ひまをなみいつうちとけむ池の心ぞ

千鳥

おのがつま松がうら島うらぶれて鳴くや千鳥もこころあるらむ

水鳥

風寒みこほらぬせせやなつみ川よどこうかれて鴨ぞ鳴くなる

網代

ひを蟲にあらそふ身をば忘れてやなほうきわざの網代もるらむ

嶺雪

降りつみし夜のまの雪やしたふらむたちもわかれぬ嶺の横雲

庭雪

庭もせにくもらぬ玉のちりひぢのつもらば山の名にやたたまし

鷹狩

狩りのこすをざさのくまをいのちにてここにや鳥のをちの山本

炭竈煙

山風に雲はきえてもうす煙まよへるかたやを野のすみがま

歳暮

をしめただゆく年波の流れてはつひによるせのよそならぬ身に

戀二十首

初戀

しるべなき戀路はやがてうき物と思ひしらでやまよひいりぬる

忍戀

思ふとも知られぬさきのうき事ぞうき身一つはやる方もなき

祈戀

年も經ぬ我れに契やかたそぎのゆきあふまでと祈るかみがき

聞戀

かげ見せぬ思もしるし今はただ音に聞きてややまかはのみづ

不逢戀

めぐりあはむかごとも知らで同じ世にありとばかりのうき契哉

契戀

契りおくいまさへ知らぬいつはりにこむ世をかけて何か頼まむ

逢戀

契ありて今ぞかさぬるさ夜ごろもうらなくとけよなかの下紐

別戀

とどめおくわが魂はそれながらいそぐは誰れぞきぬぎぬのそら

後朝戀

覺めはてぬまた寢の床の面影やけさのうつつを夢になすらむ

遠戀

目にみえぬ心づかひはやるかひもなくなく向ふをちかたの空

馴戀

かひなしやさてしもあはぬ身をうらのしほなれ衣なるるばかりは

顯戀

とてもはや戀にすてにし身の上にたつやうき名も何か歎かむ

增戀

言の葉の露だにかけぬ身を秋にまさるなげきの色もうらめし

僞戀

色みえでうき僞の名にたつや人のこころのはなのしらくも

悔戀

つゆほさぬ袖の名殘のくやしきやすゑもとほらぬ中の道芝

經年戀

うしやただまたも逢ひ見む頼ゆゑふる川のべのすぎし月日は

忘戀

呉竹のよがれかさなるわが方に思ひいづべきふしやなからむ

思

こぬもうく別もつらし戀の身はやすむひまなき心とをしれ

片思

なにゆゑに慕ふ心ぞとばかりも思はぬなかにこりぬ我が身よ

恨

風しをるまくずが原を人とはばうらみにたへぬ身ぞと答へよ

雜十首

曉

人はまだ寐覺せぬ夜もあるものをたへて時知る鳥の聲かな

名所松

和歌の浦やさらにあつめて玉くしげ二度みがく松のことの葉

窓竹

いさぎよき竹の姿にむかひゐてふみにはうとき窓のうちかな

山家

苔ごろも寒きあらしもなれにけりげにならはしのみ吉野の奥

田家

軒近みかりつむ稲やおのづから小田のいほりの垣となるらむ

羇旅

宿とはむ方は知らねど夕日かげのこる山路をいそぐたび人

述懷

まつりごとなほきすてぬ世をいかで遑ある身と思ひなすらむ

夢

見ず知らぬ人の國まで通ふなり夢てふ物はみちしるべかも

釋教

とはでわが心にやがてわけいりぬをしへの外の法のみち芝

祝

くもらじな天つ日つぎのいやつぎに守りきにける神の御國は

御獨吟百首

寛正四年 雅親卿點

春二十首

早春雪

消えがてになほふる年とみゆるまで春てふ名をぞ雪のうづめる

孤嶋霞

あまのすむ松がうら嶋ほのみえてたつかすみさへ心ありけり

霞滿村

それとなき一村里は朝夕のけぶりながらやかすみこむらむ

霞春衣

たてぬきもおなじ霞のうす衣おりはへきるか春の佐保姫

澤若菜

行く水のみどりも清きふかせりは澤にさまよふ人やつむらむ

山家鶯

春にだに知られぬ山の下庵に人くといかで鳥の鳴くらむ

池餘寒

うすごほりむすびし頃に立ちかへり春風寒し池のささなみ

故郷梅

はなばかりのこす昔の里はあれて春ののらなる庭の梅が香

澗落梅

山風にちりしく梅のえにしあればにほひときしる谷の埋木

春曉月

おぼろなることわり過ぎつ曉の雲にもあふか春のつきかげ

去雁遙

誰が里の夢のまくらにしたふらむくれし雲井の雁のわかれ路

柳似煙

風わたるむつ田のよどのうす煙みだれなびくは柳原かも

春草短

萠えいづるみどりみじかき春の野はきえしやおそき雪の下草

嶺早蕨

わび人の折りとるためのさわらびや片岡山のみねにおふらむ

花初開

春をたれもよほすつづみうちつけに咲ける一木の花にとはばや

花滿山

おしなべて花の青葉とふりにけり櫻がそこの山のときは木

花半落

枝にのみふるぞとみえし花の雪の木蔭ひとつにつもる頃かな

杜欵冬

河ぎしに咲きしはちるか神なびの森の木がくれ匂ふやまぶき

古寺藤

春ふりし尾上の松に咲く藤はくちせぬ法のはなのたねかも

殘春少

春の名殘おしあけ方に眺むれば霞がくれの月ぞのこれる(いでぬ)

夏十五首 一首闕

首夏風

春はみし花のみやこに薫風のころのうちより夏やきぬらむ

朝更衣

朝戸出のみぎりの露のしらがさね蟬のたもとや立ちやかふらむ

岡新樹

松の葉はいつともわかで緑そふ岡べにしるきなつ木立かな

谷郭公

めづらしや谷にききつる鶯のふるすこととふ山ほととぎす

時鳥頻

たが里も夜がれぬほどにおとづれてうらみ殘さぬ郭公かな

橘薫枕

袖の香もふるき夜床のまくらよりむかしを近み匂ふたちばな

菖蒲

まだふりぬ宿のあやめもふくからに軒端の草とまづぞ見えける

泊水鶏

みる夢もなほみじか夜のうき寐かななみと水雞のたたく泊に

野夏草

しげみより露はみだれて武藏野の草の葉末のかせぞ音なき

雨中螢

音にたてぬ思の涙ふるあめにかげうちしめりゆくほたるかな

墻夕顔

なさけ知るかきほの色にいでにけり賤がこころの花の夕顔

麓納涼

いつとなき深山おろしのはげしさに麓の里はなつぞ知られぬ

湊夕立

過ぎにけり波間すずしくのこる日のかげのみなとの夕立の雨

杜夏祓

みそぎする夜のまに秋やしめなはのうちはへすずし杜の下風

秋二十首

新秋露

なにぞともとはでやしるき朝ぼらけ秋くる庭のつゆの白玉

待七夕

秋きてはいそぐ七日を待つよひの心やかよふひこぼしの空

幽居荻

すみわたる宿のさびしさほにいでておのれもかこつ荻の上風

萩映水

影みえてうつるもふかし行く水のあやにはあらぬ萩が花ずり

古砌薄

庭もせにかたぶく軒のしのぶさへみだれあひたる村薄かな

原刈萱

をれかへりふす刈萱はなかなかに露もみだれぬ野原しの原

寐覺蟲

床のつゆ枕の風もうき秋のねざめはさぞと蟲もなくらむ

海邊鹿

山風のうみふくかたに聞ゆなり釣する舟のさをしかのこゑ

秋夕風

うきながら忘れぬものか風の音のあやしと聞きし秋の夕は

關駒迎

相坂の關路をいかですぎ村の木蔭もくらききりはらのこま

山月明

わが心かくなぐさめつうきあきの大内山に照る月をみて

江月冷

秋さむき入江にうたふ釣人の袖のしづくに月ぞこほれる

松月幽

月はまだのぼらぬほどのくまながらいとふ名たてかみねの松原

擣寒衣

露霜のふかき夜さむのうらみをば誰れにうれへて衣うつらむ

雲端雁

みやこさへ旅のそらとや浮雲のあとをもとめず過ぐるかりがね

堤上霧

色づける柳の堤ゆく水もややあきふかくまよふゆふぎり

野住鶉

野をしめてふすや鶉の床までもげにやすからずわくる狩人

里黄葉

木木の色にいでずば知らじ口なしのいはでの里の秋の一しほ

瀧紅葉

もみぢする山の岩根にみだれきて秋にそめなす瀧の白絲

暮秋菊

白菊のひともとゆひの小紫うつろふあきのかたみとぞ見る

冬十五首

初冬嵐

もろく散る木の葉のあらしさきだてて山路を遠み冬はきにけり

渡時雨

行方なき佐野のわたりの旅衣いかにせよとてうちしぐるらむ

橋落葉

風にちる木の葉のするにとだえけり久米路にあらぬ谷の岩橋

寒草纔

枯れし葉もあるかなきかの一本はこやかげろふの小野の冬草

江寒蘆

舟つなぐ入江のかれ葉そのままに折りたく葦火かげあらはなり

河千鳥

佐保川や汀にこほるさざら浪こゑをのこして千鳥しばなく

淵鴨

そめいだす藍よりふかき淵の色の青ばわかれず鴨ぞむれゆく

井邊氷

風寒みいまはこほりやむすぶ手のかげさへ見えぬ冬の山の井

寒夜月

霜ふかみねぬ夜もさぞなわび人は秋だにさえし袖の月かげ

篠上霰

篠のうへの玉か何ぞと見るばかりちらでし霰ふりつもらなむ

狩場霙

みぞれふる片野のゆふべ袖ぬれて眞柴のかげをこのむかり人

庭初雪

降りそむる雪にむもるる蓬生の庭わけなれむひとやまたまし

驛路雪

山とほみ越えゆく鈴もふる雪をむまやの長やあかす見るらむ

遠炭竈

立つとしもみぬすみがまのうす煙くるる色なる山のをちかた

歳暮忘

つもるべき年のふかきを忘れつつ新春をぞ人はいそげる

戀十五首

寄鐘戀

こぬうさもしばし忘るるおもひねの夢路にかこつ鐘の音かな

寄燈戀

なげきわびきえなむとする戀の身のあはれやのこる夜半の燈

寄枕戀

せめてさはそのまぼろしようきふしもあひあふ中の枕かさなむ

寄筵戀

うちはらひとはむその夜のあらましもつもりにけりなさ筵の塵

寄床戀

もの思ふ身は秋ふけぬ床のうへのつゆまどろまず又起きもせで

寄匣戀

ちぎりしもうきは涙の玉匣みはいたづらにおもひくだけて

寄櫛戀

むすぼほれつらきおもひの亂髪つげの小櫛もいかでけづらむ

寄琴戀

わがかたに心はひきてうきことのねのみ(にのみ イ)しかよふよその松風

寄笛戀

こひたえし一夜ぞつらき笛竹の青葉はいろのかはるものかは

寄繪戀

うつしゑのたぐひかかよふ玉章のまことすくなき筆のすさみは

寄車戀

法にあふみつの車はよそにしておなじ戀路にめぐるくるしさ

寄船戀

いかにせむ身をうら舟の風をいたみ思はぬ方に浮きみ沈みみ

寄筏戀

杣川にくだす筏のとこことはにまたこの暮も袖ぬらせとや

寄蓬戀

むすびえぬ契かりほの笘をあらみしげくもかかる露の衣手

寄棹戀

わたつ海やおきこぐ船のみなれ棹さしも知らじな深き思は

雜十五首

隣里鷄

遠近の里の中垣へだててもおなじ寐覺にきくとりのこゑ

草庵雨

さらでだに露けきものを秋草のいほりをよきよ夜半の村雨

山館竹

世をわたる道はたえても呉竹のけぶりものこる山かげの庵

橋上苔

ふる川やたな橋わたる駒の足のおとせぬほどに苔むしてけり

田家水

もる小田の稻葉の雲はしぐれてもまさらぬ水やあせつたふらむ

鹽屋煙

うら風に立つしほ煙あけしきてあまの磯屋ぞとほざかりゆく

行路市

ともにたれ往來のみちにかくれてもかしこき名には辰の市人

羇中衣

やつれゆく袖やひとへのあさ衣旅の日數はたちかさねても

旅泊夢

うき旅もわれからことの泊舟なみ風ひびく夢のまくらに

望遠帆

かぜかはり波たちくらしこぐ舟のまほにも見えぬ冲つしほあひ

老述懷

すなほなる世にはかへらで老のなみかけてくるしき身の思哉

思往事

忍ぶべき現はいづれさまざまに見しもひとつのいにしへの夢

上陽人

なれはいまさへづる春にあひながら我れぞふりゆくみやの鶯

陵園妾

とぢこもりいつとも知らぬ松の門なに匂ふらむ春秋のはな

寄國祝

すむ民のうれへはいまぞ波風も治まる四方のうらやすの國

同御百首 文明元年十二月十二日 雅康卿點

春二十首

曉立春

かすかすの關路をとほみ鳥がなくあづまの春はいまかきぬらし

溪餘寒

きさらぎやなほ雲こほる谷陰はつもりし雪のひかりだになし

檜原霞

それとなき老のひはらの山かづらみぬよをかけて霞む春かな

杜霞

名もしるくうきたの森の朝がすみ風の上にや立ち迷ふらむ

名所鶯

さかき葉の香をなつかしみ春日山こずゑをこめて鶯のなく

若菜

春をつむ數はかぎりもななな種にいかでさだめし若菜なるらむ

草漸青

雪霜のふる葉ながらに色きえてみどりかずそふ草の下萠

里梅

里みゆる道のはてまで咲く梅のかごとばかりに誰れ尋ぬらむ

門柳

うゑしより老いせぬ門の春を經ていともかしこき玉やなぎかも

初花

末つひにちることわりの初櫻さかりになさで見るよしもがな

朝花

うちしめり匂へる露のしづえまで朝日待ちとる花櫻かな

嶺花

みよし野や咲きそふ枝に音たえて花にむもるるみねの松風

島花

春はただ波間のほかもちる花のみるめかるなりおきつ島人

殘花

ちるあとにまたこりずまの匂かな風にくからぬはなをしらせて

濱春月

霞よりいでみの濱の風ふけてまさごいろそふ春の夜のつき

湖歸雁

釣人の袖とともにやかへるらむかりがねとほし比良の山風

松藤

松の葉のみどりにはあらぬひとしほや花のときには春の藤が枝

苗代

むかしにはいかでかへさむ人心いまあら小田の春の苗代

折歎冬

折りかざすわが身もいろにゐでの名や花にたちそふ里の山吹

暮春

心こそまづつきにけれわかるれどあひも思はぬ春をしたひて

夏十五首

遲櫻

めづらしと花にうつろふ心さへまた春になるおそざくらかな

岸卯花

卯の花の上にみだるる玉川は岸うつなみの露やちるらむ

待郭公

こゑのみか命まつ間の郭公うきことそはで聞くよしもがな

海郭公

磯山や千鳥にはあらであまごろもこれも妻とふ時鳥かな

遠郭公

ほととぎす名殘はうつつ殘る夜の夢にやなさむよそのひと聲

瞿麥

色もなき花はさかりも知らじかしわが言の葉の大和なでしこ

岡邊早苗

とりのこす小田の早苗に露みえて岡邊をすぐるまつの夕風

樹蔭照射

ほぐしさすは山のかげのうす煙たちど知られぬ鹿やなくらむ

五月雨

降りそめし夕はいつぞみか月の面影とほきさみだれのころ

鵜川

西川や瀬瀬のわかあゆ行く方もなみまに早き鵜舟さすなり

簷廬橘

軒に生ふるしのぶ昔のかたみさへまれなるいまの宿のたち花

旅夕立

くれぬよりたちよる里や夕立のそらだのめなる旅の中宿

野螢

とぶ螢こころのくまや殘すらむ菅のあら野にかげぞすくなき

納涼

ゆく水のみどりの洞の夕すずみ忘れし夏もよそにくれにき

六月祓

みそぎする人のこころの水底もげにいさぎよき賀茂の河波

秋二十首

早秋

やつれゆく袖はいろなき老が身を秋となつげそ木木の初風

七夕別

鳥の音もきこえぬ空の星合は何をかぎりのわかれなるらむ

荻風

またとだに露はむすばで秋風やかれず軒端の荻をとふらむ

籬萩

なびきふす枝しどろにて秋萩の花ゆゑあるる籬とぞみる

行路薄

くる人もこなたかなたの道の邊に絲よりかくる花すすきかな

田上雁

秋さむき小田の稲葉の雲くれて露けきやどを雁ぞなくなる

外山鹿

たへてきく人の心よを鹿鳴く松のとやまのあけがたの聲

原露

をりかへりみだるる露の面影や野分のあとのま野のかや原

夜蟲

たが秋にいつとひ終えて岩はしのよるのちぎりをまつ蟲の聲

渡霧

風さわぐ宇治のわたりの早き瀬にうきてながるる水の朝霧

駒迎

いざよひの月毛の駒もしのぶよのためしにいづる相坂の關

關月

ふけにけり月ぞあとなき關の名のかすみしそらはただ秋の風

竹間月

夜をさむみ竹の葉みがく白露の玉の小枝につたふ月かげ

浦月

もしほくむ袖とふ月になれゆくやうき秋知らぬ須磨の浦人

古宅月

松になく鳥のからごゑひびききて宿すさまじく月かたぶきぬ

波月

くだけちる千千のこがねの波なれや岩根にかかる磯のつき影

擣衣

露霜のみのしろごろもうつ聲に夜さむの夢ぞおどろかれぬる

秋時雨

身にしめし秋のこころもすみぞめの夕の袖ぞうちしぐれゆく

江紅葉

影もみぬよるの錦かみさびえにあらふともなき山のもみぢば

九月盡

ひきとめよ今日ゆく秋の別路にのこる尾花の袖よわくとも

冬十五首

初冬

露おきし秋のよもぎの神無月今朝より霜やみだれそふらむ

瀧落葉

この山の木の葉まじりにおちそひぬ風の音羽の瀧津白絲（波イ）

庭霜

見し秋の庭のまがきはそれながら色なき霜のはなのした草

柴霰

冬ふかき片野の眞柴うちそよぎあられ吹きまく淀のかは風

嶺雪

富士の峯におよばぬ嶺の姿まで今朝はうへなき雪のをちかた

杉雪

今日もなほふる川のべはうづもれて雪にたどらぬ二本の杉

杜雪

眞鳥すむこずゑの雪にこゑそへてはらふうてなの杜の朝風

枯葦

かささぎのたてるすざきもはるばると枯葉にまよふ霜の下葦

柚寒月

影さむみいづみの柚木たつ民の心もひかぬ冬の夜のつき

磯千鳥

おのが友いづちいりぬる磯がくれ音になく千鳥みえてすくなく

冬曉

さえわぶる袖の霜夜のかねの音にうかりし秋の寐覺戀しも

河氷

漕ぎ過ぐる舟のあとのみきえそめて河づら遠き朝ごほりかな

鷹狩

忍ぶべき人やかた野の御狩場にふるやみゆきのあとも殘らで

澤水鳥

音をぞなく野澤の水のあさきえにちぎりよそなるをしの獨寢

歳暮

くれぬとも何をいそがむ年波の立ちかへるべきわが昔かは

戀二十首

不逢戀

いかにせむとはれぬうさを思ひねは慰むほどの夢をだにみず

切戀

こがれわび憂身きえなば夏蟲のひとつおもひの行方とを知れ

遠戀

くる雁のたより待ちえぬ我がなかや秋もよそなる嶺の朝霧

近戀

玉すだれかけてくるしき契かなかよふ心のひまもとむとて

閑居戀

をやみなき雨さへ宇治の里の名を我が身に知りてもの思ふ頃

忍戀

いはばやの思さへこそ忘れけれつつみなれこし月日重ねて

片思

かこたじよ誰れゆゑつくす心ともとはるる程のわが身ならずば

別戀

忘るなよわかれの路のしば車つまぬ日數にめぐりあふまで

負戀

身はつひに思ひよわりぬなよ竹のつよき心を折らぬものゆゑ

會夢戀

へだてなくばるけき中にむすぶかなもろこしにはあらぬ夢の契を

後朝戀

さながらにたつ面影を身にそへて起き出でし今朝はうさも知られず

聞〻戀

身をしをるつてとや絶えず通ふらむ君が住むてふ宿の松風

久戀

戀しさぞもの忘れせぬ春秋のうつりしかたはさだかならぬに

白地戀

袖ぬらすほどだにもなし朝顔の花をかごとのあけぼのの露

恨戀

すゑとほる恨になして人心かはるこひ路のうきしるべかな

祈戀

うき中にさやは祈りし初瀬山ひはらの色をこころなれとは

絶戀

立ちよらむ波間よいづく同じ世の名殘だになき松がうら嶋

契戀

頼めただをしのふすまのうらもなく契かさぬる池のこころを

僞戀

待ちよわるあだしたのめもいつまでか誠のまじる夕なりけむ

變戀

定めなき心のすゑの松山はなみこえてだにうらみはてめや

雜十首

寄衣雜

あまの子にあらぬ衣のうらぶれて宿も定めずしほたるるころ

寄枕雜

ぬるとなき夢のうき世のかり枕うつつかさなる老もうらめし

寄華雜

立ちかへる春を知らばやあづさ弓柳さくらのはなのみやこに

寄市雜

しづかなる身にうることや難からしさわぐ名ばかり辰の市人

寄船雜

おきつ風聲うちそふる棹のうたやすみの江遠き海士の釣舟

寄橋雜

飛鳥川しらず月日はゆく水のあはれくるしき瀨瀨の岩ばし

寄鐘雜

うつしきく鐘には罪もきえぬべし雪のみ山の法のこゑごゑ

寄木雜

ひさにへて誰れか待ちみむ玉椿はなは八千世の春のためしを

寄苔雜

朽ちもせぬ名にこそたてれ苔ごろもかわかぬ露のたてぬきにして

寄水雜

頼みあるちかひふかめて石清水すむわが國は神にまかせむ

同御百首

長祿二年十二月 兼良淨空雅親點

春十五首

立春

池水に春のひかりをうつすよりとくるこほりぞ鏡とはなる

海邊霞

小舟漕ぐ霞のうちの伊勢のあまは春の色をやみるめかるらむ

春雪

消えやすき名にしふりてもうたかたのあはれつれなく積る雪哉

竹鶯

契あれやみがきの竹のよそぢまでやどりともなふ鶯のこゑ

披垣緣竹上苑黃鳥すでに不感之王春をともなふといへども、さらに無疆の寶算を契れる由、尤以珍重存候。太閤

野若菜

しめし野やおほくの年をつむ賤も春は若菜の名にやめでぬる

梅風

われのみとうつすま袖の梅が香をまたいづ方に風誘ふらむ

柳露

朝露のむすぶと見てもみだるるやよわき柳のいとのはるかぜ

春雨

世にそそぐ春のめぐみの雨ならばあを人草も色やそへまし

青帝以雨露之恩白草改枯槁之色、おなじく聖化撫育の中に生じて、おぼえず愚情の嗟咲にあらはれ候也。太閤

春月

たが世よりかすみそめてか春の夜のうらみを月に殘しきぬらむ

歸雁

をりにあふ名殘もさぞな山の端にわかるる雲のころもかりがね

禁中花

なれきつる雲井の花もはづかしや代代に及ばぬ春を重ねて

漢唐至治之君耻不及堯舜之淳化、古今聖情自然符合者歟、珍重候。大閤

此御製も殊勝銘心肝候へども、ふるくはやさしくとも、またはづかしなどいひならはし候。この中の五文字、やの字、いささか耳にたち候。浮空

山花

時しあれば匂へる花のからにしき今も立田のはるの山姫

庭上落花

忘れめや誘ひし花の雪の庭に消えずばありとも風のつらさを

里欵冬

色にいまゐでのわたりの里人もいはぬ名だての花ざかりかな

池藤

風わたる汀の藤の花かつらみなぞこかけて波やたつらむ

夏十首

卯花似月

うつぎ垣花咲くころの月夜よし夜よしと賤もたれにつぐらむ

卯花時鳥（月カ）

待たれつるなくをならひの時鳥なほもうづきのそらねとぞ思ふ

雲間郭公

あくがれて聲やをしまぬ郭公なれも雲間のつきになく夜は

河五月雨

たちわたる波の音してくらはしの川上ふかしさみだれのころ

野夏草

一夜ねし春の野もせのつぼすみれしげみが下にたれ忍ぶらむ

沼螢

かりのこす沼のあやめに亂れてもなほ音にたてぬ夜半の夏蟲

夏曉月

まだよひの月ぞと思ひし影のうちに鳥の音しきる遠方の空

夕立

夕立のなごり涼しき數みえて日影にみがく軒のたまみづ

水邊納涼

涼しさもわくや泉をむべしこそみづの秋とはいふべかりけれ

杜蟬

陰しげみなく音もすずし空蟬の名にたつころのころもでのもり

秋十五首

初秋朝

吹きにけりめにさやかなる秋の風あしたの原は露迷ふまで

七夕

この夕ひらくる天の八重雲にやすの河原は舟よそふらむ

野萩露

さく花の錦やあらふ宮城野にあめとふる枝の萩のしたつゆ

庭萩風

植ゑしより風のやどりのさびしさもほかにかこたぬ庭の萩原

夜鹿

むば玉の夜深き山になく鹿はうきつまごひのみちやまどへる

夕蟲

くれわたる秋のあらしもうちしをれ寒き野中のまつ蟲のこゑ

霧中初雁

玉章にまちこしかひもなく雁のこゑのみすぐる夕ぎりのそら

山月

宇津の山まだ染めやらぬ露の色に月ぞうつろふつたの下道

浦月

吹くからに曇るとみれば波の上の月にもいとふ浦のしほかぜ

水郷月

影だにももらぬあしやの里人は浦に出でてや月をみるらむ

聞擣衣

きくわれもいこそ寝られねさよ衣うちもやすまぬ賤がしわざに

栽菊

うつしうゑてまづ袖ふれむ仙人のすみかゆかしき菊のひと本

御紫宸之日旦碧洞之秋、仰察睿念之所趣、更非凡慮之所及候。太閤

秋霜

霜まよふ秋のまさきの色さえてあらそひちるか峯のくず葉も

松間紅葉

しぐれてもおのれつれなき松風のおとにいろそふ下紅葉かな

暮秋

ほのかなる秋の面影なほとめてのこるもかなしあけがたの月

冬十首

寐覺時雨

身に近き老の枕にふりそめて寐覺もさぞととふしぐれかな

谷落葉

音たてぬ岩間のなみの色みえて木の葉うち出づる谷の下風

枯野

花に見し千種もちりぬ今ぞげにうき世のさがの野邊の冬がれ

冬月

見る人や楢のはかしはちりはてて木の間さはらぬ月はもるとも

豐明節會

年ごとにかさねて見ばやをみ衣その世も遠くとよのあかりを

湖千鳥

むれてたつこゑさへすめる湖にうつるかげこそ千鳥なりけれ

田氷

せきいれしいつぬき川に風さえてむしろ田遠くこほりしくなり

雪散風

風の上にくだくる玉のちりぞとやありか定めず雪のちるらむ

雪朝

出づる日にむかひの山のますかがみかけて曇らぬ雪の色かな

歳暮

いたづらに過ぎこし年を數ふればみまくほしさの春としもなし

戀二十五首

寄月戀

袖の上の月もやつらき今こむといひしたのみも涙とふよは

寄雲戀

立つとみてあとなき空の雲なれやあだなる中にかくる契は

寄風戀

かさねえぬせこが衣の身にしめていとど契もあきの初かせ

寄雨戀

ぬれつつも若しやとふやのあらましはいつのならひぞ夜半の村雨

寄露戀

ひるまなきわが衣手よ草葉にもあしたゆふべぞ露もおきける

寄山戀

うしつらしいかであだなの高嶋やまだなれもせぬみをの中山

寄海戀

するつひになにとなるをの奥津洲にみちひく潮のからき契よ

寄池戀

聞くもうし一本ながらうつるてふ心のはなのおほさはのいけ

寄杜戀

ちぎりしも今ぞうなての杜深み棲むやまどりの音をのみぞなく

寄河戀

頼みある名に流れてもあすか川かはらぬものを人のうき瀬は

寄木戀

たのまめや言の葉はそのうす紅葉あだにちりくるなげの情は

寄草戀

わけたえし人目とともに枯れにけり身をあきはつる宿の道芝

寄水戀

同じ世にすむともいはじ逢坂や影だに見せぬ關の清水は

寄石戀

動きなきこころづよさはいつまでぞ千引の石も曳けばひく世に

寄火戀

身を浦のいさりのたく火あはれてふ人も波間にこがれてぞふる

寄玉戀

みだれわび袖よりあまる白玉はこころの瀧やおちまさるらむ

寄衣戀

今は身をうづら衣とふりはてぬかりにきてさへとはぬ契に

寄絲戀

かきたえてくる夜よそなる軒端にも思ひはすてぬささがにの絲

寄鏡戀

せめてうき人のかがみにうつれかし影となりぬる戀の姿の

寄船戀

身を秋の一葉の舟のともすればよるかた知らぬおもひなりけり

寄屋戀

とへかしな夜がれあまたの秋ふりて露のみふかきすずの篠屋を

寄門戀

三輪の山身をよそにして月日のみすぎ立つ門ときくもうらめし

寄戸戀

こりず猶まつぞつれなき柴の戸のさすがになれし人もとふやと

寄垣戀

竹がきのへだてもはてぬ契とて忘れぬふしや身にのこるらむ

寄庭戀

殘しおく露のよすがはありとてもわけ見む人やよもぎふの庭

雜二十五首

曉鶏

鳥の音は時をたがへず聞ゆなりをさまらぬ世を思ふねざめに

夜燈

深き夜の月はめでねど手枕のよそにそむくる閨のともし火

簷松

かぎりなく落ちそふ松の雫かな軒のしのぶに露やあまれる

窓竹

いたづらにむかへる窓はくれ竹のすぐなる友もかひやなからむ

嶺雲

あさなあさな外山の嶺にたちそふは誰がおもかげぞ雲の一村

瀧水

やま風や水上たかくわたるらむ更におちそふみ吉野のたき

柚木

柚山やまがれる枝の蔭しげみなほきこずゑもえぞあらはれぬ

曲不藏直とこそ申侍るに、まがれる枝のなほき木をあらはし侍らぬ心詞、尤絶妙候。太閤

潤草

花に咲き緑に出でて谷陰やおのがままなるはるあきの草

磯波

枝にこそさくと聞きしか白波の花の色ある磯のまつが枝

山家嵐

すみなれぬ深山の人も友ときくあらしはいつの契なるらむ

山家杉

すみぞめの夕いかにと人とはば軒端の杉に鳥のひとこゑ

山家苔

苔ふかき山したいほはかりながらかりそめならぬ年や重ねし

山家夢

山里やおもひすてにし夢の世にいかなる夢のまたかよふらむ

山家煙

山住のこころも知らで夕煙おもはぬかたにすゑなびきつつ

羇中山

うぢま山旅にしあれば朝風のさむきも知らずこえゆかむかも

羇中野

ならはずよかりねの日數あさは野に小菅かたしく露のみだれは

羇中關

立つとしも見えぬ霞の關ながらこえていくへのふる里のそら

羇中浦

わけきつる波路をとほみ旅衣しほなれにけりしほがまの浦

羇中泊

まちこひし心やかよふ波まくらみやこを夢にみつのとまりは

祝

みしあればふたつの階にまふ袖の上風とほくなびくくにぐに

伊勢

五十鈴川ながれの末はにごるとも神しまもらばすまざらめやは

石清水

やはらぐる光ものりのちかひとや三つの衣にうつりそめけむ

賀茂

河波の早くやうくるみたらしに世をにごるなと祈るみそぎは

春日

春日山ふかくやなほも頼まましし身をあはせける代代のちぎりを

天皇屋根のそのかみ、同殿の勅をうけて合體の道をはじむ。臣等その末孫たりといへども、いたづらに股肱のオにともしくして、つひに耳目の明をあらはさず。かくの如くの愚暗の身、なほ棄捐するに及ばざるは、吾君聖明仁愛の至にあらずや。太閤

日吉

たのもしな志賀の浦わに立つ波の數も色そふ神のみやゐは

同御百首 應仁三年三月十六日 雅親點

春二十首

歳暮立春

くれてゆく年波さわぐ人ごころ静なれとや春のきぬらむ

山霞

かげしめしはこやの山はよそながら面影近く立つ霞かな

海霞

海原や沖をふかめてかすまずば波路のかぎりいかで知らまし

舊巣鶯

谷陰の身をうぐひすは出でやらで日數ふる巣の春のしのび音

澤若菜

ふる葉さへまじらぬ色の若菜こそ野澤につまぬ年をみせけれ

松殘雪

色さむき青葉の花とのこるより雪にもみゆる松のひとしほ

庭梅

えにしある匂はうれしこの宿の春もみとせの庭のうめが枝

野梅

枝かはす野中の松の嵐さへをりしる梅の香ににほひつつ

朝柳

絲よわき柳のかせのかたよりになびけば靡くはるのあさ風

故郷春雨

みどりそふ軒端の草のはるのいろは雨にぞ殘るふるさとの空

春月

春はなどつらき住家の關の名をそらゆく月にとどめおきけむ

曉歸雁

名殘なほありあけがたに鳴く雁よげにうき物かかへるさの聲

待花

この頃の風にひらくる花ならば枝にいとはぬ聲やまたまし

尋花

み吉野やにほはぬ花のかくれがも今ぞ尋ねむ岩のかげみち

見花

世のうさのみるが中より忘るるは花やをさまる春に咲くらむ

折花

今もふる眞柴が上の雪ぞとや花おちそふるはるのやまびと

惜花

したふとも思はぬ花を思ふ身もおとろへにけり春の木のもと

里欵冬

いはでただうつろふ色は里人の心のはなか井手のやまぶき

池藤

まづなびくみぎはむもれて咲く藤の花よりよする池のささ波

暮春

やよひ山うつるひかりのかげろふや迷ふ霞もあるかなきかに

夏十首

里卯花

山里は夏さへさむき垣根とやなほきえがての雪の卯のはな

挿葵

みたらしやよるべの水に影みえて今日のかざしの名こそ曇らね

杜郭公

夏きても聲ぞつれなきほととぎすいつかなかなく衣手の杜

關郭公

一聲のすずかの關の遠近に鳴きはふるさぬほととぎすかな

岡郭公

時鳥こゑぞをやまぬ岡のべやひと村雨はまつにすぎても

五月雨久

しげる葉の露さみだれて今日いくかもらぬ日影を松の木の下

田邊螢

おのが思ほにあらはれて小山田の秋をばよそに行く螢かな

浦夏月

夏といへばあまやよるよるかりつらむ月をみるめの浪ぞ少なき

水邊納涼

この夕松風すずしいはし水こがくれふかみ秋すむらしも

遠夕立

ひととほりはるる日影のうつりきて雲の端分くるよその夕立

秋二十首

早秋朝

吹きみだす露のあさけに色みえておとせぬ袖のあきのはつ風

七夕夜深

さぞなげに待ちみる時のほどなさもうしみつ過ぐる星合の空

野萩

をりにあふ草の花野にまじりても萩のにしきや名には立つらむ

萩風

かよひくる風ぞたよりとそよぐより露はあとなき庭の萩原

薄露

朝夕にしをるる袖のつゆけさも尾花にかぎるあきや知るらむ

夕鹿

わけてこのたそがれ時に鳴く鹿はほのぼの見えし妻や戀ふらむ

初聞雁

色づける葉月の風のこゑのうちに鳴きて時しる雁はきにけり

草蟲

心から音になく蟲よ月草のうつろひやすき花にすだきて

河霧

いな舟は浪路へだてて最上川のぼりし霧ぞうきてくだれる

秋田

打ちなびきたつとはよそに湊田のほなみ音なき浦風ぞ吹く

禁中月

なれなれし秋も名殘のおもかげやなほ身をさらぬ雲の上の月

社頭月

空にすむ光もおなじ神の名やよなよなたかき月よみのみや

古寺月

高野山音すむ鐘はこれやそのあかつきの空の近きつきかげ

山家月

のがれすむ山のかひぞと見つるかなましら鳴く夜の有明の月

閑居月

人はいさ露をよすがに尋ねても月こそとはめよもぎふのやど

隣擣衣

へだてなききぬたの音にふしわびぬ夜寒もおなじ竹の中垣

岸菊

谷川や岸うつなみもうちかをり花に花そふきくのしたみづ

嶺紅葉

あらしたつ木の間のもみぢあらはれて秋にうつろふ嶺の松原

谷紅葉

色もさぞこりゐる雲の下紅葉まなくしぐるるみ谷がくれは

九月盡

くれはつる秋を名殘とおきそはばあすや形見の袖の露霜

冬十首

行路時雨

都人ならはぬ道にふりはへて往來の袖もさぞしぐるらむ

橋落葉

しきかかる木の葉のいろの錦より中たえやせむ山のかけ橋

寒草霜

萩原やもと見し秋の色もなし霜のふるえにはなは咲けども

湖氷

釣舟の棹にくだけしうす氷けさはいくへの比良のうみづら

冬月

天津風さえゆく雲のうす衣かさねもあへず月ぞこほれる

湊千鳥

汐風の空にやさそふみなと川なみよりたかく千鳥たつ見ゆ

朝雪

雲ふかみ日はかげろひて朝戸出の軒端の山に雪ぞかがやく

夕雪

降りくるる竹のねぐらに鳴く鳥の雪にこもれる聲の淋しさ

夜雪

月まちて色やそへましよひの間の雪たどたどし庭のおもかげ

歳暮

したへとやさまざま見つる夢の世の現すくなく年ぞ暮れ行く

戀一一十首

寄山戀

おく山のおどろこすげのみだれあひかよはぬ道に物思ふころ

寄峯戀

かりにだにまだみぬ中はつくばねの峯こす風のつてもかひなし

寄杜戀

眞葛葉のうらみもさぞと思ひやれしのだの森に風のさわがば

寄關戀

こえし身も中中くるし下紐のうちとけがたき關のへだてに

寄岡戀

跡たえし契をかこつ涙さへながれそひぬるみづぐきのをか

寄野戀

かぎりなき戀路の末よ武藏野もわくればはてのありとこそきけ

寄原戀

うき身よりあまる思にたへもせでつれなや玉のを野の篠原

寄河戀

いかにせむなべてこほれるあさ川の渡らぬなかに袖はぬれつつ

寄江戀

沖津波かけぬちぎりも住の江の松をたのみのある世とを知れ

寄沼戀

沼水のあやめも知らぬ戀の身は底にふかめてねこそなかるれ

寄澤戀

わきかへる心の水のけぶりさへまた下むせぶふじのなるさは

寄池戀

汲みて知る人だにあれな池水のあさはかならぬ底のこころを

寄瀧戀

たえずなほ音にたたでもかこためや身はよそになる瀧の白絲

寄橋戀

とだえつる契のするにかへるやとしひて憂世にふるのたか橋

寄海戀

知るらめや松浦の沖にみつ潮のからきは戀のこころづくしを

寄浦戀

しほけぶり靡きし末もうき中やおもはぬかたの須磨の浦風

寄濱

うつろひし心の色のあだ波はかけてもなにかきくのなが濱

寄潟戀

わが袖はいつかひがたのかたし貝あふてふ事も波にしをれて

寄湊戀

すて舟のよるせにまよふ戀すれば我が身はかけの湊とを知れ

寄嶋戀

とほざかる人はよもぎが嶋なれや通ふたよりも波路へだてて

雜二十首

曉寐覺

おもひでの昔にかへる寐覺よりうき身の老をなぐさめにして

谷松年久

かしこしないくその春の光なき谷にもおなじまつのみさをは

籬竹

露霜のふるきまがきにうちなびき朽ちせぬ草や竹のひともと

路苔

柴人のかよひたえにし道なれやおく山かげの苔のひとすぢ

葦間鶴

たつ空もなぎさの葦のかりの世にこころうかれてたづや鳴くらむ

羇中送日

海山のかはるながめにうつりきて知らずいくかの東路の空

羇中懐都

旅ごろも袖とふかげもそれながら月の都はなほぞこひしき

旅泊重夜

とまり舟さすがに夢は見ずもあらず見もせぬ波のよるよるの音

海邊眺望

たちまよふ雲と波との中空にわけいる鳥やおきのつりぶね

寄夢懐舊

天の下をさめし姿ゆめにだに見ぬ世のことのしのばしきかな

寄老懐舊

このうちの鶴の齢もふりまさるすを戀ひわびて音をやなくらむ

寄世懐舊

くれ竹のすなほにあらぬ今の世のうきふし繁き昔をぞおもふ

寄情述懐

おろかなる心の末もとほるやとなほわけすてぬ敷島のみち

寄涙述懐

うきを知る涙よいかにやつれゆく袖の上をばはなれざるらむ

寄身述懐

しひて猶うきに心や留むらむ身をばすてても捨てやらぬ世は

寄榊神祇

神もまたひとしほ色やまさかきの春の日たかくあふぐ宮居に

寄鏡神祇

さぞいかにうつすとばりのます鏡うちとへだてぬ神の姿を

寄水釋教

汲みしらぬもとのさとりはかひもなしすむや野中の水の心も

寄燈釋教

かかげつるこころひとつの燈火やうへなき法の光そへけむ

祝言

梓弓やまとしまねのをさまりし昔の道にいまぞかへらむ

百首 御獨吟

春二十首

立春風

けふさらに千年の春をよばふらし枝をならさぬ松のあらしも

早春氷

春をあさみ池のこころもおのづから汀にとけぬうす氷かな

海路霞

こぐ舟のあとはさらでも波の上の霞や八重の潮路なるらむ

竹林鶯

のがれすむ友にやならふ鶯のたけのはやしを出でがてに鳴く

名所若菜